

# 2018（平成 30）年度 自己点検・評価報告書

神戸海星女子学院大学  
2019(平成 31)年 3 月

# 2018（平成30）年度 自己点検・評価報告書

## 目 次

I	自己点検・評価（目標）	1
II	大学・学部等の現状とその評価	
1	大学改革運営会議	3
2	自己点検・評価委員会	4
3	I R 委員会	6
4	教務委員会	7
5	F D ・ S D 委員会	8
6	国際交流委員会	10
7	保育・教職委員会	11
8	学生委員会	13
9	キャリア委員会	15
10	ハラスメント相談委員会	17
11	入試委員会	19
12	宗教委員会	22
13	図書委員会	26
14	生涯教育委員会・地域交流委員会	30
15	英語観光学科	32
16	心理こども学科	35

# I 自己点検・評価（目標）

2018(平成30)年度 自己点検・評価 (目標)

	委員会・学科	基準	2018自己点検・評価 目標
1	大学改革運営会議	1-③	将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定する。
2	自己点検・評価委員会	2-② 2-⑤	内部質保証の推進に責任を負う全学的な体制の整備について見直しを図り、内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行う。
3	IR委員会	2-④	IR体制を整備するとともに、教職員のIR意識を高める。
4	教務委員会	4-⑥	「海星教学調査」及び「卒業生アンケート」の教務関連の内容を精査し、学年を追って社会人としての基本的な知識と技能を修得していることを確認できるようにする。
5	FD・SD委員会	6-④ 10-⑤	教職員の資質向上に向け、組織的に研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。
6	国際交流委員会	4-④ 7-②	海外での留学および各種研修によって、学生の実践的英語力の向上のみならず、自国の文化同様、異文化に対する理解も深め、国際的なコミュニケーション・スキルを身につける。上記のうち特に今年度は、学生が自国の文化をさらに深く認識し、異文化に対する視野を広げることを重点的目標とする。
7	保育・教職委員会	4-③	保育士資格、幼稚園・小学校教員免許状取得等のカリキュラムを見直し、再編成を行う。
8	学生委員会	7-②	各委員会等との連携を図り、修学困難生に対するサポート体制を整備する。
9	キャリア委員会	7-②	早期からのキャリア教育をさらに充実させるために、2年次「海星学Ⅱ」におけるキャリア支援を再考し、強化させる。
10	H相談委員会	7-②	①学生対象にハラスメント防止啓発活動を行う。ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。 ②教職員対象にハラスメント防止研修会を行う。学生同様、ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。
11	入試委員会	5-③	2019(平成31)年度入試において、両学科で入学定員を確保する。
12	宗教委員会	1-① 1-②	本学の建学の精神であるキリスト教的価値観への学生の理解を深める。
13	図書委員会	8-③	学修を支援する企画展示やイベントを実施し、図書館利用の推進を図る。
14	生涯教育委員会 地域交流委員会	9-③	本学の社会連携・社会貢献において多方面の学外組織や団体と連携を図りつつ、教育研究および学修成果を社会に還元する。
15	英語観光学科	4-④	自文化及び異文化について主体的に研究する機会を授業内外で設け、学生の自文化・異文化への関心を高め、理解を深める。
16	心理こども学科	4-④	学生の主体的参加を促す授業内容や授業方法を工夫する。授業アンケート等を通して学生の実態を把握し、さらなる改善を図る。



## II 大学・学部等の現状とその評価

## 1. 大学改革運営会議

### P 【目標】基準1-③

将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を策定する。

### D 【現状説明】

文部科学省による学校法人運営調査（以下「運営調査」とする）が2018年11月27日に実施されることが決定し、そのための事前提出資料として学長が作成した「神戸海星女子学院大学 中長期計画」（以下「中長期計画」とする）の内容について2018年8月24日開催の大学改革運営会議（以下「運営会議」とする）において審議し、一部修正を行った。また、12月7日開催の運営会議において運営調査時に提出した中長期計画の内容を確認した。内容は、I 施設、設備等、II 教育課程等、III 学生支援、IV 教員に関するものである。

### C 【点検・評価】

中長期計画は、2019年度に計画の実行に入るものから5年以内に実行すべきものが大半を占めており、中期計画として必要なものが含まれている点において評価できる。課題は、早急に長期計画の策定及びその他の諸施策の策定を行うことである。

### A 【改善策】

2019年度に中長期計画策定チーム（仮称）を立ち上げ、中央教育審議会が平成30（2018）年11月26日付で提示した『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』に則った中期及び長期の計画を策定し、大学改革委員会において内容を審議する。また、本学の独自性を生かした諸施策についても策定する。

## 2. 自己点検・評価委員会

### P 【目標】基準 2-②、2-⑤

内部質保証の推進に責任を負う全学的な体制の整備について見直しを図り、内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行う。

### D 【現状説明】

上の目標は、2017 年度の目標と同一のものである。2017 年度の自己点検・評価委員会において次の 3 つの課題と各々の課題に対する改善策を挙げた。

#### <2017 年度の課題>

- ① 本学の内部質保証規程では、自己点検・評価委員会は「自己点検・評価の結果について、改善に向けた方策の検証組織」（第 2 条 4）として「自己点検・評価の結果により、改善に向けた方策を取りまとめ、これを大学改革運営会議に提出する」（第 4 条 2）こととなっている。本年度（2017 年度）、委員会では、各委員会・学科の自己点検・評価報告書を「2017（平成 29）年度 自己点検・評価報告書」としてまとめ、大学改革運営会議に提出したが、内部質保証規程にあるように、改善に向けた方策を取りまとめ、大学全体としての改善に向けた方策を考え、それを大学改革運営会議に提出することはしなかった。
- ② 内部質保証の統括推進組織が大学改革運営会議であることが内部質保証規程（第 2 条 3）には明記されているが、改革運営会議規程には明記されていない。
- ③ 大学改革運営会議から、各委員会・学科の PDCA は個別に見ると適切に行われているが、大学全体としての統一感に欠けるという指摘があった。

#### <2017 年度の課題に対する改善策>

- ① 自己点検・評価委員会において全学的な PDCA サイクルの適切性について点検・評価し、その結果に基づく改善に向けた方策を大学改革運営会議に提出する。
- ② 大学改革運営会議が内部質保証の推進に責任を負う機関であることを改革運営会議規程に明記する。
- ③ 本学の建学の精神、ディプロマ・ポリシーに則った大学としての統一テーマを大学改革運営会議が取り決め、それを自己点検・評価委員会を通して各委員会・学科に提示し、それに基づいて各委員会・学科が個別の目標を設定することにする。

2018 年度の本委員会では、上に挙げた<2017 年度の課題に対する改善策>に基づく取組を行った。改善策①に対する取組として、2019 年 2 月 28 日に各委員会・学科から自己点検・評価委員会に提出された自己点検・評価報告書（本委員会及び入試委員会の報告書を除く）を取りまとめ、3 月 18 日に開催した外部評価委員会において外部評価委員に各委員会・学科の自己点検・評価について説明した。外部評価委員からの意見は、各委員会・学科の自己点検・評価活動を評価するという内容であった。3 月 20 日の自己点検・評価委員会では、外部評価委員会の評価結果を報告するとともに、2018 年度の自己点検・評価活動は、統一テーマ「学修成

果」のもと、全学的な PDCA サイクルが適切に行われたことを確認した。この内容を 2019 年度の大学改革運営会議に提出する予定である。改善策②については、別紙のとおり、改革運営会議規程を見直し、改定案を作成した。改善策③については、2018 年 6 月 13 日に開催された第 3 回自己点検・評価委員会において、2018 年度の全学的統一テーマとして建学の精神、教育理念・目的及びディプロマ・ポリシーに基づく「学修成果」を設定した。

また、自己点検・評価規程に関して、第 4 条「（自己点検・評価）委員会は、必要に応じて学長が招集し、その議長として議事の運営に当たる」という内容と第 6 条「委員会は、各評価単位から提出された自己点検・評価を検証し、改善の方向性を学長に報告する」という内容を合わせると、委員会の議長（委員長）である学長が、委員会の点検・評価の結果を学長に報告するという不自然な内容になるため、改革運営会議規程に加え、自己点検・評価規程及び内部質保証規程についても内容を見直し、規程の改定案を作成した。

### C 【点検・評価】

2018 年度の自己点検・評価活動は、各委員会・学科の目標設定にあたり「学修成果」という統一目標を設定して行ったため、各委員会・学科の点検・評価活動の目標がはっきりと定まり、全学的な統一感が生まれた。また、改革運営会議規程、自己点検・評価規程、内部質保証規程の改定案（2019 年度第 1 回教授会に上程予定）を作成したことにより、内部質保証システムの適切性の向上が期待できるようになった。この 2 点により、2018 年度の自己点検・評価委員会の点検・評価活動は評価できる内容となった。

### A 【改善策】

各委員会・学科の自己点検・評価目標の設定に関する全学的な統一テーマの設定及び内部質保証システムに係る 3 つの規程の改定により、2018 年度の目標は概ね達成することができた。2019 年度以降も個別目標の設定にあたり、全学的な統一テーマを設定し、改定した規程に基づき内部質保証システムの適切性について引き続き点検・評価を行うこととする。

### 3. IR 委員会

#### P 【目標】基準2-④

IR 体制を整備するとともに、教職員の IR 意識を高める。

#### D 【現状説明】

前年度（2017 年度）は IR 室を置き、IR 室会議において IR 活動を行ったが、2018 年度は、委員会方式の組織での活動を試みるため、IR 委員会（以下「委員会」とする）として IR 体制を整備することにし、基準2-④の「教育研究活動、自己点検・評価結果、財務、その他の諸活動の状況等の公表」に向けて活動を行うことにした。財務状況等、本学のホームページ上に既に公開しているものもあるが、教育研究活動、自己点検・評価結果、学生の学修成果や大学全体の教育成果の可視化に関する情報、教学に関する取組状況等について充実した内容を公開する必要がある。そこで、2018 年 6 月 27 日の第 2 回、7 月 25 日開催の第 3 回、11 月 21 日開催の第 4 回の各委員会において、まず、ディプロマ・ポリシーに基づいた学生の学修成果をホームページに公開することにし、2018 年度の卒業生アンケート 2（2019 年 3 月 14 日実施予定）及びキリスト教研修アンケートの結果を 2019 年度に公開することにした。また、2016 年度～2018 年度の自己点検・評価報告書も 2019 年度に公開することにした。さらに、2019 年 1 月 30 日開催の第 5 回委員会において、平成 30 年度私立大学等改革総合支援事業調査票 1 の設問③（以下「支援事業調査票 1-③」とする）に則る方向で、2019 年度は委員会としてではなく、再び IR 室として活動を行うこととし、現存する IR 室規程第 3 条の業務内容を『2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』（中央教育審議会、平成 30 年 11 月 26 日 pp. 31-32）（以下「中教審のグランドデザイン」とする）を参考に 2019 年 3 月 27 日開催予定の第 6 回委員会で見直すことにした。

#### C 【点検・評価】

IR 体制の整備に向けて、2019 年度にディプロマ・ポリシーに基づいた学生の学修成果に関する情報及び自己点検・評価結果をホームページ上に公表できるようにしたことは評価できる。また、2018 年度の委員会の活動により、委員会の各委員の IR 意識を高めることもできた。ただし、2019 年度に公表する情報は、公表すべき情報の一部であり、大学全体の教育成果に関する情報や教学に関する取組状況等についても充実した内容を公表するとともに、公表する内容について説明責任を果たせるようとする必要がある。さらに、委員会の委員にとどまらず、大学教職員全員の IR 意識を高めることも必要である。

#### A 【改善策】

2019 年度は、改定した IR 室規程に基づき、上に挙げた支援事業調査票 1-③及び中教審のグランドデザインを参考にして情報公表の促進を図る。具体的には、毎年度末に行っている 1～3 年次生を対象にした教学アンケート及び 4 年次生を対象にした卒業生アンケート 1 の内容を見直し、改めたアンケートを 2019 年度末に実施するほか、資格取得や就職等の実績について合格率や就職率を含めて公表するようとする。また、大学教職員全員の IR 意識を高めるための FD・SD 研修会を開催する。

#### 4. 教務委員会

##### P 【目標】基準4-⑥

「教学調査」及び「卒業生アンケート」の教務関連の内容を精査し、学年を追って社会人としての基本的な知識と技能を修得していることを確認できるようにする。

##### D 【現状説明】

学生の学習習慣や成果に対する意識を問う「教学調査」(1年次～3年次生対象)の質問項目の見直しをしたところ、①学科によって回答が大きく異なることが予測される設問、②現状にそぐわない設問、③意図が不明瞭な設問などがあった他、④五件法の設問が多く、それらの設問に関しては回答の傾向が明確に見えない可能性があることが確認された。

##### C 【点検・評価】

課題として確認された項目を以下のように改善した。

- ①調査冒頭で学科を選択する項目を追加する、②現状にそぐわない設問を削除・修正する、  
③質問の意図を明確にする、④五件法を四件法に修正する（ただし、知識・技術が向上したか否かを問う設問については五件法のままする）。

##### A 【改善策】

「教学調査」を始めるに際し他大学の調査項目の傾向を参考にしたこと、また過年度の調査結果との比較分析のためには大きく質問項目を変更しない方がよいという考え方から、今回は設問内容詳細に深く切り込む見直しはしなかった。「教学調査」開始から一定年数が経っているため、今後、その内容の妥当性についても検討していく必要があるだろう。さらに、4年次生対象の「卒業生アンケート」の教務関連項目についても検討をする予定である。

## 5. FD・SD委員会

### P 【目標】基準FD6-④ SD10-⑤

教職員の資質向上に向け、組織的に研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。

### D 【現状説明】

(1) FDでは、組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげる。SDでは、大学運営を適切かつ効果的に行うために、事務職員及び教員の意欲及び資質の向上を図るために方策を講じる。2017年4月1日に大学設置基準が改正され、SDの義務化が規定された。

これらの点検評価項目および統一テーマから現在実施している業務を振り返る。

#### ① 授業評価

春、秋の年2回、5人以上の受講生のクラスで実施している。マークシートに無記名式でのアンケートをとる。質問項目例として、自分の授業に向かう態度、教員の授業評価を10項目で問うている。回答は5件法で思う、やや思う、どちらでもない、やや思わない、思わない。春秋学期における回答の全体平均は共に4.12であった。

#### ② 非常勤講師との面談

専任教員は学生とは週に1~2回程度授業で学生の様子を観察する。それだけでは、個々の学生の様子はわからない。そこで、非常勤講師(40名)にFD委員の教員が分担して面談を行った。

#### ③ 学生に対する意見調査アンケート(任意)

授業を中心とし、ふだん学生が思っていることを自由記述で回答を求めた。

#### ④ 授業公開

春秋学期、それぞれ一コマを教員同士が自由に参観できる時間を設けた。

#### ⑤ 授業出席調査

全教員が15回の授業、各コマにおける出席人数を調査し、出席率を出した。

#### ⑥ 研修

各委員会が必要と考えた研修を悉皆で実施した。

### C 【点検・評価】

上記①から⑥においてそれぞれについて再度点検・評価を行った。

#### ① 授業評価

質問項目の7 教員の説明は理解しやすかったか?について無記名式で行っているので、仮に思わないと答えた学生がいた場合に、個別に補足説明がしにくい。また、本調査は5件法で行っているので、3どちらでもないに偏った場合に、改善策が見えにくい。

#### ② 非常勤講師との面談

非常勤講師の授業時間に合わせるので、専任教員の授業との調整が難しい場面もあった。学生の授業態度等、概ね良好との意見が多くかった。

#### ③ 学生に対する意見調査アンケート(任意)

今年度は、E T学科 24. 1%、P C学科 55. 1% 全体で 38. 7%の回収率であった。例年 4割程度の回収率があり、学生にとっても自分の考え、意見を伝える場となっている。

④ 授業公開

個々人の専門領域が違うので、互いに見合うまでには至っていない。

⑤ 授業出席調査

春秋学期共に、全授業の平均出席率 88. 6%だった。欠席する学生が固定化していることに課題が残る。

⑦ 研修

各委員会で必要と考えられる研修が実施されている。悉皆をめざしているが十分とは言えない。

#### A 【改善策】

今回、アンケート調査の一つである「学生が授業に向かう姿勢」で、授業の予習、復習がはかどっていないことが明らかになった（春 3.56、秋 3.62）。次年度のシラバスには、予習復習内容を記入することになり、教員個々人が、予習復習の必要性を意識しやすくなるだろう。また、質問方式を 5 件法から 4 件法へ変更すべきか、次年度最初の委員会で検討することとする。

非常勤講師との面談では、委員会で情報交換した後、関係部署にも伝えることで改善された事例もある。様々な調査、アンケートを行ったが、年度末に一斉に改善策を話し合うだけではなく、委員会開催時に少しづつ出し合ってきたことは良かったと言える。さらに、非常勤講師との面談では、内容によっては情報共有の場を広げる必要もあるだろう。

研修については悉皆ではあるが、公務等で出席できない教職員を除いて、全員に近い教職員が研修に参加できる工夫も必要である。

## 6. 国際交流委員会

### P 【目標】

基準 4-④、7-②

海外での留学および各種研修によって、学生の実践的英語力の向上のみならず、自国の文化同様、異文化に対する理解も深め、国際的なコミュニケーション・スキルを身につける。

上記のうち特に今年度は、学生が自国の文化をさらに深く認識し、異文化に対する視野を広げることを重点的目標とする。

### D 【現状説明】

語学留学・海外研修においては、異文化の環境のなかで生活をするという実体験そのものが、学生にとっては、国際的なコミュニケーション・スキルを練磨する絶好の機会となり、それはまた自然に国際的な感覚を身につけるための大きな原動力となっている。そうした事実に鑑みれば、本学が小規模大学であるにもかかわらず、語学留学のみならず、海外でビジネス・モデル的存在の企業研究、英語による幼稚園実習等、学生自身の興味と目的に照準を合わせた選択肢が可能であり、またこうした多彩なプログラムを反映して、留学・研修先国も、イギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ、そして韓国と多岐にわたる現状は、ある程度評価してもよいだろう。

### C 【点検・評価】

上記における現状は、しかしながら、留学・海外研修等によって国際的視野・感覚が「自然に」身につくのを見守り期待するだけではとされるものではない。こうした現在の状況をさらに向上させるためには、委員会の任務は次の段階にきていくようと考えられる。つまり学生に提供する留学・海外研修の量のみならず、その質（外国語習得、社会研修）の核となるべき学生の国際的視野の深化と拡大、そしてそれにともなう自他文化への正確で深い理解等の検討が必要である。

### A 【改善策】

留学の質の向上をはかるためには、留学における学生の目標達成に対し、教育者側のさらに強力なサポート体制が必要であるが、こうした積極的な働きかけの一環として、教育的配慮・意図を反映するガイドライン等の作成が有効であると考えられる。

たとえば具体的な方法としては、留学・海外研修前に各学生に予め課題アンケートを配布し、留学・海外研修中、異文化等に関する具体的課題・項目について実際に観察・熟考する機会を与え、最終的にその成果を自らレポートにまとめ上げさせることによって、学生が異文化理解をさらに深め、国際感覚を磨くように指導する。そして帰国・復学後、学生から提出された課題レポートを留学・海外研修前のものと比較し、学生の留学成果の量（留学期間、授業時間等）のみならず、それらの質（語学、国際理解等）も検証対象とする。

これらの実践は、今年度すでに始動段階にあるが、長期間の取り組みが必要であり、次年度の自己点検でも継続課題として予定されているものである。

## 7. 保育・教職委員会

### P 【目標】基準 4-③

保育士資格、幼稚園・小学校教員免許状取得等のカリキュラムを見直し、再編成を行う。

### D 【現状説明】

#### (1) 保育士資格取得カリキュラム

平成 29 年度の児童福祉法改正により、平成 31 年度入学生から新たな保育士課程を適用するためカリキュラムを見直し、兵庫県・神戸市に対して学則変更申請を行った。

#### (2) 幼稚園・小学校教員免許状取得カリキュラム

平成 29 年度の文部科学省での再課程認定申請における事前相談において、心理こども学科カリキュラムが「教員養成を主たる目的とする学科」としての要件を満たしていないとの指摘を受け、卒業要件について再考するよう指導があったことをふまえ、平成 31 年度用の学生要覧に記載する免許状や資格の卒業要件について見直しを図った。

#### (3) 保育士資格取得カリキュラム、幼稚園教員免許状取得カリキュラム

保育士あるいは幼稚園教諭をめざす学生は例外を除き、両方の資格と免許状を取得している。全国で認定こども園が増加している実態からも、両方の取得は必要不可欠である。(「子ども・子育て本部調べ」によると、2018 年 4 月 1 日現在の認定こども園数は 6160、最多数は大阪府の 573 園、次は兵庫県の 463 園である)

保育士養成課程と幼稚園教諭養成課程を開講する本学において、それぞれの法律等に規定する内容に留意してカリキュラムを編成した。両方を取得する学生の単位数増の負担を軽減するために、保育士と幼稚園教諭に共通する科目(幼児教育学原理、教育方法論)を設定した。

### C 【点検・評価】

#### (1) 保育士資格取得カリキュラム

保育士資格取得カリキュラムについては、「神戸海星女子学院大学 保育士課程新旧対照表」(資料 1) のように変更した。主な変更点は、次のとおりである。

① 児童福祉法改正による保育士養成課程の見直しを図り、教科目の変更(名称や授業形態、単位数、目標や教授内容等)を行った。

② 本学保育士課程の見直しを図り、以下の点について変更した。

・①の見直しに伴う科目名の変更・科目の追加・従来科目の再編

・新規科目追加に伴う従来科目の配当年次変更

・見直し以外の従来科目の名称変更(保育原理 I を保育原理、保育実習指導 A を保育実習指導 I 等)

・指定基準である履修単位数(68 単位以上)に近い保育士課程とするため、教養科目・選択必修科目的必修単位数を 90 単位以上から 86 単位以上とした。

#### (2) 幼稚園・小学校教員免許状取得カリキュラム

##### ① 幼稚園教員免許状取得カリキュラム

幼稚園教員免許状取得カリキュラムについては、「心理こども学科共通科目」(資料 2-1)、「心理こども学科専門科目」(資料 2-2) の幼稚園 1 種免の欄のとおり変更した。

##### ② 小学校教員免許状取得カリキュラム

小学校教員免許状取得カリキュラムについては、「心理こども学科共通科目」(資料2-1)、「心理こども学科専門科目」(資料2-2)の小学校1種免の欄のとおり変更した。

必修単位を見直し、「初等英語科指導法」等30科目とし、心理学を学べる学科の特性を生かして、「心理・臨床・発達」の分野から、1年次に「感情・人格心理学」を、2年次に「知覚・認知心理学」を、3年次に「心理学支援法」を本学独自の選択科目とした。さらに、資格関連科目の「子どもの保健」を本学独自の選択科目とした。(資料2-2の☆印)

### (3) 保育士資格取得カリキュラム、幼稚園教員免許状取得カリキュラム

現行では、保育実習(保育所実習・児童福祉施設実習)と幼稚園教育実習を計5回実施し、期間は2年次(2月)の幼稚園教育実習から4年次(6月)の保育実習までである。保育・教職担当教員から、全ての実習を終えてから就職を考える学生も多く、準備期間が短いのではないかという意見があり、実習時期についても見直しを図った。

(資料3 実習配当年次の変更に伴う保育実習・幼稚園実習の時期)

### A 【改善策】

心理こども学科のカリキュラムを再編成した結果、保育士・幼稚園・小学校の卒業要件が分かりやすくなるとともに、学科の特長を生かした科目編成になった。

今後の課題と改善策として、次の3点が挙げられる。

① 再課程認定において、幼稚園教職課程は旧法で申請しているので、平成31年度は、現在の科目と担当教員で実施する。

しかし、平成34年度末までに「領域に関する専門的事項」(5領域)の「健康」「人間関係」「言葉」「環境」「表現」を開講する必要があるので、担当教員を配置する。

② 幼稚園養成課程と共通の科目であった保育士養成課程の「保育の表現技術」(初等音楽、図画工作等)が改正により、「保育内容の理解と方法」に変更された。

今後、①の科目変更による学生の履修に係る負担の軽減が必要である。

③ 保育実習と幼稚園実習を3年次で終了するカリキュラムを設けたことにより、就職指導の時期が早くなり、指導の成果が大いに期待できる。

しかし、平成32年度は、2学年同時期となる実習があるので、早期に実習施設を確保していく。

## 8. 学生委員会

### P 【目標】

基準：7-②

「各委員会との連携を図り、修学困難生に対するサポート体制を整備する。」

### D 【現状説明】

学生支援について、現下学生相談の件数は増加、内容は多様化の傾向があることが認知されている。サポート体制に関しては、学生相談、学修支援、経済的支援等総合的な拠点を設ける大学、あるいは相談内容に応じて複数の窓口を設置する大学等、様々な形態で行われている。本学において、2014年度～2017年度の相談室の相談件数は、113、111、105、179(件)で、2017年度に激増した。一方、退学者数は、2014年度から8、16、8、18(人)と在籍者に対する中退率は2～5%である。文部科学省調査の2016年の大学中退率平均データは2.65%であるので、決して低い値とはいえない。「面倒見のいい大学」と評価されている本校においては、低い数値を目指したいところである。

本学では、学修支援を必要とする学生に対して、2014年度からは、保健室あるいは相談室で学生から聞き取りを行い、養護教諭が担任と教科担当者へ学生の状態説明を行っていた。2017年度には、合理的配慮の申請様式が作成され、実際的な合理的配慮の支援が本格化した。さらに2018年に退学者数の減少を優先課題に据え、新たに2つのサポート組織を開設した結果、現在3つのサポートルームが存在することとなった。それは、①主にカウンセラーと養護教諭が対応する相談室、②学生が支援に当たる授業サポート、③合理的配慮を要する学生に対し、専門の教員が支援を行うサポートルームStellaの3室である。今年、①の相談室を利用した学生は、2017年度の半数の83件である。そして、②の特定の必修授業に対し、4年次生の学生が教員補助として指導に当たる授業サポートは、90分の補講を全21回行い、利用した学生は3名、③の継続してこのサポートルームStellaを利用した学生は5名である。

### C 【点検・評価】

従来、相談室での相談内容は、養護教諭が取りまとめ、環境改善を考え、個々の学生に適切だと考えられる調整を提案し、教学課を経由して、担任と教科担当者へ説明を行うという連携を整備させていた。しかしこれまで核となっていた大学の養護教諭が現在は中高保健室と兼務になっていること、2018年度に教学課が教務課と学生課に分断したこと、支援ルームが増えたこと等の理由で、それまでの連携が円滑に機能していない状態であるといえる。個々のサポートルームは独立し、学生課・教務課・養護教諭・心理学教員が所々で対応し、総括する部署や人員があいまいになっている。本来、サポートルームは単独の部署や教員だけで管理、運営できるものでもない。組織として機能させるためには、的確な判断力と支援に対する深い知識と学生に対する洞察力を持つ複数の教職員の協同力が必要である。相談内容は決して外部に漏れてはならないが、親身なサポートのためには各部署での情報共有が必然とされる。各サポートルームの状態を把握し、必要に応じて部署間の連携を図る組織作りのために、核となる新しい委員会を設置することも検討されたが、現在学長と学生部長、保健教員で構成している保健委員会を再編成し、活性化させることにした。具体的には、現保健委員会メンバーに心理学教員

が加わる。そして適宜、会議に学科主任・教務部長・別の心理学教員が参加する。また、現在学期で1回開催の委員会を月1で開催させることになった。これはサポート体制整備のための大きな第一歩であると考える。

合わせて、学生委員会として独自に新たなサポートルームを始動させることを考えた。それは、下宿生のためのサポートルームである。現在、一人暮らし、または祖父母と暮らしている学生が27名である。内6名が、休学または留年という状況にある。これは非常に高い割合である。試験的に1月末に下宿生のための会合を開いたところ、学生の声を聞くことができ、気軽に一人暮らしの学生が集まり、語ることのできる居場所作りとして次年度から本格的に始動させることとなった。開放的で新しい形の支援がスタートしたと評価できる。

#### A【改善策】

下宿生のサポートを加えると、現在本校には4つのサポートルームが存在することとなる。ますます、相談内容、サポートの在り方が複雑化、多様化することが予想される中で、大学としては、個々の学生に対し、公正かつ平等（個々の支援に適した）の支援を提供しなければならない。そのために、教職員全員がサポート全般に対する共通の理解と認識を持ち、大学としての方向性を統一することが責務である。そのために、合理的配慮を含むサポート全般の理解の為のFD・SD研究会を開催すること、これが次年度に向けての課題である。

引き続き、連携体制についての点検と見直しを隨時行う。また、修学困難生は相談したいという衝動が起きた時が大切であるため、受付時間をできるだけ長くする工夫も必要である。あるいは、出身高校との連携も必要かもしれない。また、支援が必要な入学生も確認されているため、その支援方法の考案も必要である。

サポートの業務は限りなく、铭々のためモデルに倣うこともできない。そのために、大学専任の養護教諭の確保、あるいは地域と密着したソーシャルワーカーやアウトリーチの支援も望まれる。できる限りにおいて、学生に寄り添うことのできる小規模大学ならではのサポート体制を実現していきたい。

## 9. キャリア委員会

### P 【目標】

基準：7-②

低学年からのキャリア教育をさらに充実させるために、2年次「海星学Ⅱ」におけるキャリア支援を再考し、強化させる。

### D 【現状説明】

平成11年に我が国において「キャリア教育」という文言が公的に登場し、その必要性が提唱され、中央教育審議会はその調査研究のまとめとして、平成23年「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の答申を発表した。大学においてもその方策に対し、学校から社会・職業への意向を見据えたキャリア教育・職業教育の改善と充実が求められ、実践的な職業教育の充実とともに、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力の養成が課題となっている。

本学においては、職業意識・能力の形成を目的とした専門分野と直結した職業教育は正課教育の授業科目において日々行われている。そして、卒業までの具体的な目標設定や生涯を見通したキャリアプランニングを考えるために、社会・職業の基盤となる知識をまず学修するキャリア教育の授業が、1年次に配当されている「キャリアデザイン入門」である。この授業では、人・自分・社会との出会いを通して仕事・キャリアを考え、グループワークを行い、ワークシートの記入することにより、コミュニケーション力、文章力を高めていく。これが、本学のキャリア教育の入り口となる。また、3年次生においては、3月からスタートする就職活動に向けて、「就職サポートプログラム」が実施される。インターンシップのためのエントリーシートの書き方、ビジネスマナーや面接対策などの実践的なプログラムであるが、長年に渡り修正・改善が繰り返され、充実したプログラムが展開されている。しかし、2年次は基礎的・汎用的能力を専門的職業につなげていくため、とても大切な時期であるにも関わらず、キャリアプランニングを行うキャリア教育と直結した授業科目がない。そのため、「海星学Ⅱ」において、社会的・職業的自立に向けてのキャリアプログラムが少し組み込まれている。「海星学」は、本学の学生として身につける素養である KAISEI パーソナリティを学ぶ授業である。これは、まさに内面を磨き自己を高める学修であり、キャリア教育の根幹であると言える。この時期に将来の目標を定め、自己の意識をしっかりと確立させるために、「海星学Ⅱ」におけるキャリアサポートプログラムを再考し、強化せる必要があると考えた。

### C 【点検・評価】

前述のように、2018年度までは、「海星学Ⅰ」においては直接的なキャリアの授業ではなく、「海星学Ⅱ」において、社会制度を学ぶための日本年金機構の講話1回、卒業生の講話を聞くピアサポート2回、職業意識を高めるためのキャリアセンターによるキャリアの指導が1回、計4回のキャリアの授業が実施されていた。これを、「海星学Ⅰ・Ⅱ」において各4回、年間で計8回キャリアサポートの授業の実施を提案した。具体的には、「海星学Ⅰ」において、キャリアプログラム①「社会を知る・年金制度」、キャリアプログラム②「社会で働く」、キャリアプログラム③「職種・業界を学ぶ」、キャリアプログラム④「キャリアを考える」の4回である。

①は日本年金機構員の講話、②は本学のキャリアセンター員の授業、③④は外部講師を招き、社会・職業についての見解を深め、意識を高める。また「海星学Ⅱ」においては、卒業生によるピアサポート①②、社会で働く③④の計4回実施をする。ピアサポートは本学の卒業生を講師として招き、③はキャリアセンター員、④は学科教員が担当し、学生のキャリアに対する意識を深め、自己の専門分野と社会との関係が構築できるよう計画を立てた。「海星学」で、キャリアサポートの時間を増やすことに対して、抵抗を感じる教員もいた。しかし、「海星学」で学修する KAISEI パーソナリティの学びは、自己の内面に働き、自己の精神を磨く。これは、長い生涯の自己のキャリア形成のためである。そしてそこに、具体的なキャリアサポートとしての社会・職業の学びが加わることにより、外面から自身を感化し、自己の知見が高められる。これは、まさにキャリア教育そのものである。海星学においてキャリア支援の授業回数を増やすことは、とても意味のあることだと考える。

合わせて、1年次に配当されている「キャリアデザイン」は、2017年度までは本学教員が授業を行っていたが、2018年度は非常勤講師の授業に代わった。本来、学長の講話以外にキャリアセンター担当の適性検査とその解説の2回の授業があったが、次年度からは、さらにキャリアセンター員と学科教員の授業が加えられる。これで、本学での学修の学びと将来を結ぶキャリア教育の入り口をしっかりと指し示すことができるよう改新することができたと考える。

#### A 【改善策】

今年は、1年次における「キャリアデザイン」、2年次における「海星学」、3年次における「就職サポートプログラム」と、学年ごとにキャリアに対する意識が深められるよう、また本学での専門分野の学びと直結できるよう、キャリアサポートの体制を整えた。また、次年度、現在週4日勤務のキャリアコンサルタントが、キャリアセンター課員として勤務することが決まった。それによりキャリアの軸が強化されると考えられる。今後はさらに、各学科教員と連携を取りながら、学年ごとの目標を模索し定め、キャリアポートフォリオを整備していきたいと考えている。

## 10. ハラスメント相談委員会

### P 【目標】

基準7-②

①学生対象にハラスメント防止啓発活動を行う。ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。

②教職員対象にハラスメント防止研修会を行う。学生同様、ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。

### D 【現状説明】

①に関しては、2018年7月の基礎ゼミの時間を利用して、ハラスメント防止啓発活動を実施した。授業の一環だったこともあり、出席率は83%であり、6割程度であった前年度よりもかなり高かった。ハラスメントに関する基本的な知識をDVD視聴を通じて学び、また、昨年度までに実施した学生対象ハラスメント防止研修会で取り上げられた事例や質問についてまとめたレジュメを共有した。最後にアンケートを実施した結果、ハラスメントの理不尽さ・怖さという反応や、アルバイト先でのトラブルについての関心の高さが明らかになった。また、初めて聞いたという感想も多く、ハラスメントについて学べてよかったです、必要な時間であった、と多くの学生から回答が得られた（資料1）。

②に関しては、2018年9月5日の午前11時から60分の教職員対象ハラスメント防止研修会を実施した。台風の影響で出席率は85%（専任教員の欠席は3名）であった。講義を通じてハラスメントについての理解を深め、実際の事例を用いて防止のための考え方について学ぶことが出来た。アンケートを実施した結果、参加者からいくつかの質問があげられたので、後日講師の先生から質問への回答をいただき、教授会でそれを共有することが出来た。定期的な研修の必要性などがアンケートにも書かれていた（資料2）。

### C 【点検・評価】

①参加率が改善した。アンケートには、知らなかつたことが多く、今後はこのようなことにならないように気を付けたい、必要な研修であった、とのコメントが寄せられたため、伝えるべき内容は学生に理解されたと考える。

②台風の影響もあり、全員の参加とはならなかつた。出席率の改善が課題である。事例や具体的な対処法、ロールプレイなどを希望する意見もあったが、60分の講義で実習を入れることは難しい。非常勤の先生方の参加が2名であった。夏季休暇中であるため、非常勤の先生方の参加は難しいかもしれないが、できれば全学への周知が必要である。

### A 【改善策】

①ハラスメントに関する理解度を具体的に確認できるような項目をアンケートの中に設ける。また、ハラスメント関係の図書等の紹介を基礎ゼミの中で実施できるように準備していく

②出席率の改善のために、日程の周知を早めに行い、非常勤の先生方にも参加を働きかける。60分では短いかもしないので、あと20分から30分の延長ができるないか、講師の先生に打診する。教職員から学生へのハラスメントを防止するために、具体的な例を用いて学び、ロールプレイなどのワークも実施していただけるようする。ハラスメント関連の研修会や図書の紹介を適宜行っていく。ハラスメント相談委員の自主学習のための図書を購入し、2冊を図書館にも寄贈できるよう計画する。

## 11. 入試委員会

### P 【目標】基準5-③

2019（平成31）年度入試において、両学科で入学定員を確保する。

### D 【現状説明】

一昨年、本学では久しぶりに入学定員を確保でき、昨年も継続することができた。しかし、18歳人口の減少や教学志向など、本学を取り巻く状況はさらに厳しくなっているので、昨年に続き定員確保を目標とした。そのためには、本学の名前、学科内容、特徴などを受験生や高校・塾の先生方、保護者の皆様に知っていただくことが必要である。そこで以下のような広報活動を行った。

- ・大学案内、各種リーフレットの作成
- ・ホームページでの本学の内容紹介
- ・SNSを活用した副次的広報
- ・オープンキャンパスを夏期を中心に8回、それに加えて個別相談型オープンキャンパスを開催
- ・DMハガキを4,5回、1000件ずつ送付、業者からも別に送付
- ・一斉メールの配信
- ・高校・塾教員対象説明会=年4回（本学2回、大阪1回、姫路1回）
- ・高校訪問（全教職員で1校につき複数回）
- ・交通広告（山陽電鉄と神戸市営地下鉄）
- ・高校等での進学相談会・出張授業（147件）
- ・来校者や進学相談会参加者に対応した教職員による葉書の送付。

以下のような多様な入試日程を設定した。

- ・AO型[KAISEI]入試（Ⅰ期～Ⅳ期）
- ・指定校推薦
- ・公募推薦（A～D日程）
- ・一般入試（前期A・B日程、後期A・B日程）
- ・センター試験利用試験（Ⅰ～Ⅲ期）

Ⅰ期で、これまでの2教科2科目型に加え、3教科3科目型を設定入学生を確保するため、以下のような授業料免除、奨学金制度を設定した。

- ・英検2級相当以上の資格を有する入学者に授業料免除制度。

ポイントによって春学期または1年間の授業料を免除する。

- ・奨学金給付制度

指定校推薦、公募推薦A日程の専願受験者で奨学金給付制試験の受験者の各学科1名

の成績優秀者に、入学年度の春学期及び秋学期の授業料等の半額相当額を給付する。

- ・入試成績優秀者奨学金制度。

一般前期 A 日程で学力検査の得点率が 80%以上の受験者、大学入試センター試験利用 I 期日程で学力検査の得点率が 70%以上の受験者のうち、各日程 2 名を限度に入学年度の授業料等相当額を免除する。

- ・入学金免除制度

公募推薦 A・B 日程専願者で同窓生子女及びカトリック系高等学校出身者を対象として入学金を免除する。

- ・大学入試センター試験利用 I 期の 3 教科 3 科目型志願者で学力検査の結果が得点率 70%以上の志願者すべてに入学金の一部（10 万円）を免除する。

以上のような奨学金制度、入学金免除制度を設け、入学者増をはかった。

#### D 【点検・評価】

オープンキャンパスの参加者 356（保護者等 223）名、土曜進学相談会での来校者は 26(12)名。志願者は英語観光学科 127 名、心理こども学科 64 名、全学で 192 名、合格者は英語観光学科 122 名、心理こども学科 61 名、全学で 181 名であった。

大学全体で 3 年連続入学定員を確保することができ、またこの 3 年の内で 109 名（+編入学 1 名）ともっとも多い入学者数となった（2018 年度 97 名、2017 年度 98 名）。入試日程では AO 型 29 人が入学し、日程別では最多であった。指定校推薦は両学科で 12 名と減少傾向にある。これは以前なら指定校で入っていた受験生が合格時期の早い AO 型に流れしたことや高校進路指導として指定校推薦を敬遠する傾向にあることなどが影響しているであろう。

心理こども学科は AO 型 16 名、と指定校推薦 9 名で約 7 割の入学生を確保しており、公募推薦は 4 名、一般 3 名、センター試験利用 3 名と前半の試験に比べ後半の試験では低調であった。

これに対し、英語観光学科は AO 型では 13 名の入学者があり、指定校推薦は 3 名と少なかったが、公募で 14 名、一般入試 23 名、センター試験利用 20 名と、後半の試験で多くの入学生を確保することができた。

両学科を比較すると、英語観光学科は後半の日程を中心に、心理こども学科は前半の日程を中心に入学生を確保した。

しかし、英語観光学科は 73 名と定員の 1.62 倍であったのに対し、心理こども学科は 36 名で定員に達せず、充足率 72% であった。この傾向はこの 3 年間続いている。

センター試験利用 I 期で 3 教科 3 科目型を設置したが、英語観光学科で 25 人中 8 名、心理こども学科で 6 名中 2 名が 3 教科 3 科目型で受験しており、一定の成果があったと考える。

## A【改善策】

心理こども学科は定員を確保できていないのは、保育・教育関係の志願者が全国的に減少していることが最大の原因であろう。これに対しては心理こども学科、そして大学全体で対策を考えいかねばならない。アドミッションセンターとしては、心理こども学科はAO入試や推薦などの早めの入試日程で受験生が確保されているので、心理こども学科については早めに受験生にアプローチするよう心がけることが必要である。

一方英語観光学科は大きく定員を超え、最後のセンター試験利用Ⅲ期と公募Dでは合格者を絞らねばならなくなった。入学者を大学が選べる状況になったことは好ましいとも言えるが、それより早い入試日程での受験生よりも優秀であると考えられる受験生を不合格にせざるを得ないことは非常に残念である。後半の試験でどれくらいの入学生が確保できる定かでない状況のAOや公募推薦A～C日程で入学者を絞ることは非常に難しく、悩ましいことではあるが、来年度はどのように対応できるか検討したい。

成績優秀者奨学金は、これまで3名しか入学していないが、とくに昨年卒業した2名など非常に優秀で模範的でいたので、各日程各学科1名ずつという制限を次年度より撤廃することとなった。

広報媒体については、2019年4月実施の新入生アンケートより、新入生たちが本学を選択した際の最初のきっかけを具体的に探ることができないかという考えから、アンケート内容を改訂し、かつ提出時に簡単な聞き取りを実施することで、重点的に広報すべきポイントを絞り込もうと検討している。それにより効率的、効果的な学生募集・広報を実現したい。

また、近年、高校生はパソコンから離れ、個人のスマートフォンひとつで様々な情報を収集するようになった。特にSNSは、検索エンジン(YahooやGoogle)なども使用せず、SNSの中でキーワード検索をし、情報を得るようになった時代に、溢れる情報の中、SNSで本学をアピールする書道がHP閲覧のきっかけになることも増えてきた。TwitterやInstagramで広告や入試情報、オープンキャンパス情報を発信することも少なからず誘導効果を発揮するとして、2018年度より力をかけている。

## 1.2. 宗教委員会

### P 【目標】

本学の建学の精神であるキリスト教的価値観の学生の理解を深める。

### D 【現状説明】

上記の目標達成を客観的に判断するために、2014年度から学生に対し、キリスト教精神の理解度を尋ねるアンケートを各キリスト教研修内においてアンケートを実施している。2017年度までの各学年の研修内容は次の通りである。

1年次：【新入生オリエンテーション2】（大塚国際美術館）

絵画等を通してキリスト教の世界に触れる。

2年次：【キリスト教研修I】（カトリック夙川教会）

本学の保護者である聖母マリアについて、講話と音楽を通して学ぶ。

3年次：【キリスト教研修II】（神戸布引ハーブ園 森のホール）

本学のもう一人の保護者であるアシジの聖フランシスコについて、講話とDVD鑑賞を通じて学ぶ。

4年次：【4年次研修】（兵庫県立淡路夢舞台国際会議場/ウェスティンホテル淡路）

講話（「女性の生き方」一いのち・生きる・いくしむー）と講話に基づくグループ・ディスカッション及び全体発表を通して自分自身を見つめ直す。

昨年度の自己点検・評価の「改善策」は次のようにまとめられていた。

①本学の建学の精神につながる研修の在り方を、学生の意見を取り入れながら考え、調整していく。そのために、1～3年次生にもキリスト教精神の理解度を問い合わせ、その理由の記述欄を設け、研修の実施内容・方法についても委員会において検討を重ねることにする。

②また、キリスト教研修以外の行事からも、キリスト教的精神を学び得ることができるを考える。そのために、ミサやクリスマスキャロルなどの出席率を高められるよう画策し、キリスト教的価値観を学生に伝えていく努力を続ける。

そこで、本年度は、以下の①と②について改善策を実施し、その結果について考察することとする。改善策として、①については研修に対する学生の意見を反映し、より学生が受け入れやすい形の研修になるよう工夫することを試みた。また②については、ミサやクリスマスキャロルなどの出席率の向上を目指し、タイムスケジュールの見直しや、基礎ゼミ等を通じた周知の工夫を試みた。

①について、昨年度、「この研修を終えて、1年次生のとき（2年次生・これまで）よりもキリスト教の精神に対する理解が深まった。」という問い合わせに対して、4「大変そう思う」、3「そう思う」、2「あまり思わない」、1「思わない」のいずれかを選択する項目を加えた。この質問に対する結果として「本学の建学の精神であるキリスト教的価値観の学生への周知度を高めるという目標は、アンケート調査結果からかなり達成できている」という報告があったが、「あまり思わない」「思わない」と回答した学生に対し、今後の研修内容の改善につ

なげるため、その理由を書く記述欄を設けるという改善策が提示された。しかし、一方の選択にのみ記述欄を設けることは、記述を面倒と感じる学生が選択番号を曲折しないかという懸念から、4年次生のアンケートには昨年度よりすべてに選択理由の記述欄を設けた。

表1 キリスト教的精神に対する理解度の深まりを尋ねるアンケート項目

- |  |
|--|
| 2年次)この研修を終えて、1年次生のときよりもキリスト教の精神に対する理解が深まった |
| 3年次)この研修を終えて、2年次生のときよりもキリスト教の精神に対する理解が深まった |
| 4年次)これまでの研修を通してキリスト教的精神に対する理解が深まった         |

表2 キリスト教的精神に対する理解度の深まりを尋ねるアンケート結果の学年別比較

		大変そう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
2014年	1年次				
2015年	2年次	31 (39.7%)	35 (44.9%)	8 (10.3%)	4 (5.1%)
2016年	3年次	13 (19.4%)	43 (64.2%)	8 (11.9%)	3 (4.5%)
2017年	4年次	22 (30.2%)	45 (61.6%)	6 (8.2%)	0 (0%)

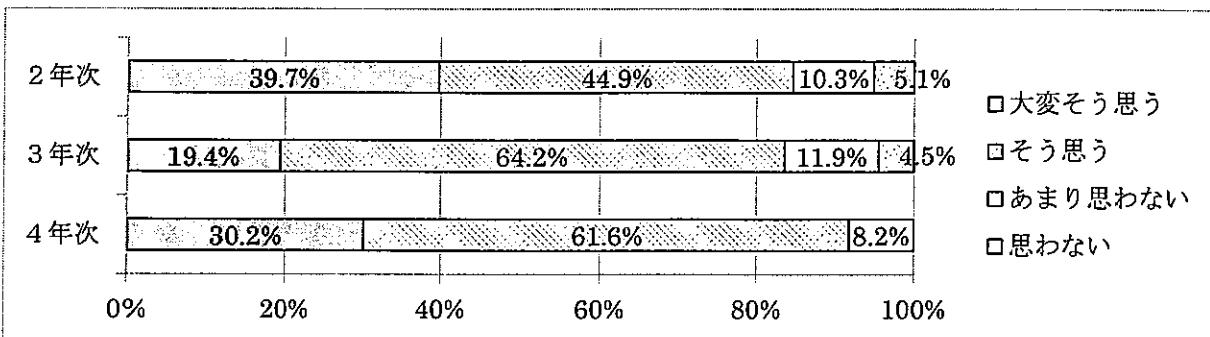


図1 キリスト教的精神に対する理解度の深まりを尋ねるアンケート結果の学年別比較のグラフ

表1・表2の昨年度のアンケート結果より、2016年度の3年次生の研修について、キリスト教的精神に対する理解度の深まりに対し、「大変そう思う」と回答した学生が前年度の39.7%から19.4%と半減していた。「大変そう思う」と「そう思う」とを合算すると、8割を超え、他の研修の数値とも大差ないが、それでも、2年次、4年次が3割以上の値となっていることを考えると、研修への学生への理解度、満足度の低さは明らかであった。その理由として、自由記述の中に、「なぜわざわざハーブ園まで出かけてやらなければならぬ研修なのかがわからない」という意見が多かった。DVD視聴に関しても、日程の都合で元々120分のDVDの半分しか視聴できないため、「大学構内で出来る研修内容では」という学生からの意見もあった。なお、2015年度入学生の結果については、前年度からの理解度が深まったと思わない、と回答した学生が25%と増加していた。

そこで本年度は、①については、3年次のキリスト教研修Ⅱの講師の変更に伴って研修内容を見直し、会場である布引ハーブ園での研修を、その会場の特徴を生かし、アッジのフランシスコが愛した自然をより体験しやすい内容に改変した。2018年度に実施した研修

の内容は以下の通りである。

### 3年次：【キリスト教研修Ⅱ】（神戸布引ハーブ園 森のホール）

本学のもう一人の保護者であるアシジの聖フランシスコについて、講話と『アシジの聖フランシスコ（2016）藤城清治作 女子パウロ会』絵本鑑賞を通じて学ぶ。また、より聖フランシスコを体感できるよう、今まで実施しなかった聖歌『ごらんよ空の鳥』の合唱、聖フランシスコの祈りの唱和、そして、「わたしのハーブ」を探すワークを実施した。

ワークを実施するために、昼休みの間に、ハーブ園を散策し、自分の気に入ったハーブを学生に探させる。そして、各自が所持しているスマートフォンで、そのハーブの効能を検索し、午後のワークでワークシートにそれを記入させる。その後、「こんなに小さな草花でさえ、誰かの役に立っている。それではあなたは、どんなところで誰かの役に立つことができるでしょうか」と問いかげ、考えさせる。自分の長所について自己申告することが難しい学生もいると考え、4, 5人の小グループで、お互いの素敵なところ、役立っているところについて、褒め合うワークを実施した。

研修後、アンケート調査を実施したところ、次のような結果が得られた。アンケート項目は、宗教委員会において、「キリスト教の精神、ということの意味が分かりにくいのでは」という指摘もあったため、今年度は（愛、慈しみ、思いやり等）という説明を加えた。

表3 3年次生 キリスト教研修Ⅱ アンケート項目（理解と満足度についての項目）

- |   |
|---|
| 1. アシジの聖フランシスコについて理解することができた。                           |
| 4. この研修を終えて、2年次生のときよりもキリスト教の精神（愛、慈しみ、思いやり等）に対する理解が深まった。 |
| 5. この研修は有意義であった。  |

表4 3年次生 キリスト教研修Ⅱ アンケート結果（理解と満足度についての項目）

年度（項目）	大変そう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
2016年（4）	13 (19.4%)	43 (64.2%)	8(11.9%)	3(4.5%)
2017年（4）	13 (23.2%)	29 (51.8%)	14(25.0%)	0(0%)
2018年（1）	37 (45.7%)	42 (51.8%)	2(2.5%)	0(0%)
2018年（4）	32 (40.0%)	46 (57.5%)	2(2.5%)	0(0%)
2018年（5）	47 (58.0%)	34 (42.0%)	0(0%)	0(0%)

表3、表4より、2014年入学生の3年次のアンケート結果と比較すると、「項目4. この研修を終えて、2年次生のときよりもキリスト教の精神（愛、慈しみ、思いやり等）に対する理解が深まった。」への結果は、「大変そう思う」が2倍強の40.2%、また、「そう思う」を合算

すると、97.5%と、理解度が改善されたことが示された。「思わない」と回答した学生は0%であった。

次に「項目1、アシジの聖フランシスコについて理解することができた。」についても、「大変そう思う」と「そう思う」の合算が97.5%と、理解度は高く、「思わない」と回答した学生は0%であった。

そして「項目5、この研修は有意義であった。」について、「大変そう思う」と回答した学生が58.0%、「そう思う」が42.0%であり、「あまり思わない」、「思わない」とともに0%であった。参加学生全員が研修を有意義、と評価したことが示された。

最後に、自由記述欄に、2018年度の学生のコメントの中に、「なぜここまでこなければならぬのか」という意見は今年度は見られず、ポンポン師の講話と、園内の散策やハーブに触れられたこと、グループワークでメンバーに良い所を書いてもらった体験への満足度が多く見られた。

また②のクリスマスミサ(87.2%)の出席率の改善については、宗教委員会の中でも協議し、基礎ゼミの先生方への協力を呼びかけ、ゼミごとの座席区分の明確化、出欠点呼の徹底、またミサとクリスマスキャロルのタイムスケジュールの工夫で休憩時間を長く設定しないことで、途中退席の学生数は極力抑えられたように思われる。

### C【点検・評価】

①課題であった3年次生のキリスト教研修Ⅱの理解度について、学生の意見を反映しながら研修内容の改編を実施したところ、内容が学生に受け入れられやすい形となり、研修への理解度、満足度とともに改善した。

②また、クリスマスミサの出席率についても、学生の出席状況を管理しやすい形に工夫し、スケジュールを見直したことで9割近い出席を得ることができた。

### A【改善策】

本年度は、特に課題とされた、3年次生のキリスト教研修Ⅱの理解度について改善するために対策を講じたが、他の学年のキリスト教研修についても、本学の建学の精神につながる在り方について、来年度以降もまた、学生の意見を取り入れながら考え、調整していきたい。そのために、引き続き、1~3年次生にもキリスト教精神の理解度を問い合わせ、その理由の記述欄を設け、研修の実施内容・方法についても委員会において検討を重ねることにする。また、キリスト教研修以外の行事からも、キリスト教的精神を学び得ることができるを考える。そのために、今後も、ミサやクリスマスキャロルなどの出席率を高められるよう画策し、キリスト教的価値観を学生に伝えていく努力を続けたい。

### 1.3. 図書委員会

#### P【目標】基準8-③

学修を支援する企画展示やイベントを実施し、図書館利用の推進を図る。

#### D【現状説明】

##### (1) 学修を支援する企画展示の実施

年間展示テーマ「図書で広がる、私の世界」に基づき、企画展示(表1)を「2018年度企展示一覧」とおり年6回実施し、図書を計499冊展示した(2017年度は年6回実施し、計513冊展示)。

今年度の特徴的な企画展示は、次の二つである。

- ① 6月～7月は、イベントの「お菓子の家」に関連した展示を実施し、神戸の観光資源の一つである「お菓子」とその文化への理解を深める図書や、お菓子に関連した子どもの遊びや心理を理解するために役立つ図書を展示した。
- ② 11月～1月は、人気作家の作品を読むことを提案する展示を実施した。

##### (2) 学修を支援するイベントの実施

学修を支援するイベントを年5回実施した(表2)。

#### C【点検・評価】

<効果が上がっている事項>

##### (1) 学修を支援する企画展示の実施

学生の企画展示コーナーからの貸出件数は、2018年4月1日～2019年1月31日の数値は両学科合わせて63件(2017年度55件)であり、前年度比115%に伸びた。

- ① 5月中旬から館内に展示した「お菓子の家」と学科学修を関連づけた図書を展示し、イベントと合わせて来館した学生の学修を支援した。
- ② 11月からの「人気作家の本を読もう」をテーマに実施した企画展示が、学生の読書を推進した。特に貸出が減少傾向にあった1年次生については、読書への意欲を高めることができた。(表1)グラフ「2018年度企画展示コーナー貸出件数推移」参照)

##### (2) 学修を支援するイベントの実施

イベント実施により、学生の多様な図書館利用が進んだ。また、企画展示との相乗効果によって、新書コーナーと文庫本コーナーは両学科合わせての貸出件数が伸びた。2018年4月1日～2019年1月31日の数値で、新書コーナーは49件(2017年度19件)と前年度比258%になり、文庫本コーナーは108件(2017年度83件)と前年度比130%に伸びた。

- ① 「図書館『お菓子の家』プロジェクト」では、学生がお菓子の工作を通じて子どもの心理について考える場を提供した。また、「お菓子の家」は、地域の子育て支援事業である「母と子のふれあいひろば」に活用される等、成果があった。
- ② 「新書の海へ、漕ぎ出そう」では、新書の検索方法を紹介し、新書コーナーについて

学生に周知できた。

- ③ 「図書で旅する世界の街角」では、各コーナーをめぐるポイントラリーを通じて学生の図書館利用や各コーナーへの利用の幅を広げた。参加学生のコメントから、一定の成果が確認できた。((表2)項目「学修成果へのはたらきかけ」参照)
- ④ 「1・2年次生に読んでほしい本」では、文庫本や新書等を中心に1・2年次生の興味や関心を広げる図書を提案することができた。
- ⑤ 9月～12月にかけて、館内で英語多読図書の課題にグループで取り組む姿が見られた。
- ⑥ 10月～11月にかけて、絵本の貸出件数は少ないが、館内の返本台に絵本が多く返却されていることから、館内利用が進んだと推定できる。
- ⑦ 指定図書コーナーは学修に直接関係する図書を配架している。指定図書コーナーからの2018年4月1日～2019年1月31日までの学生の貸出件数は、英語観光学科では54件(2017年度40件)、心理こども学科では129件(2017年度94件)と大幅に伸びた。

#### <改善すべき事項>

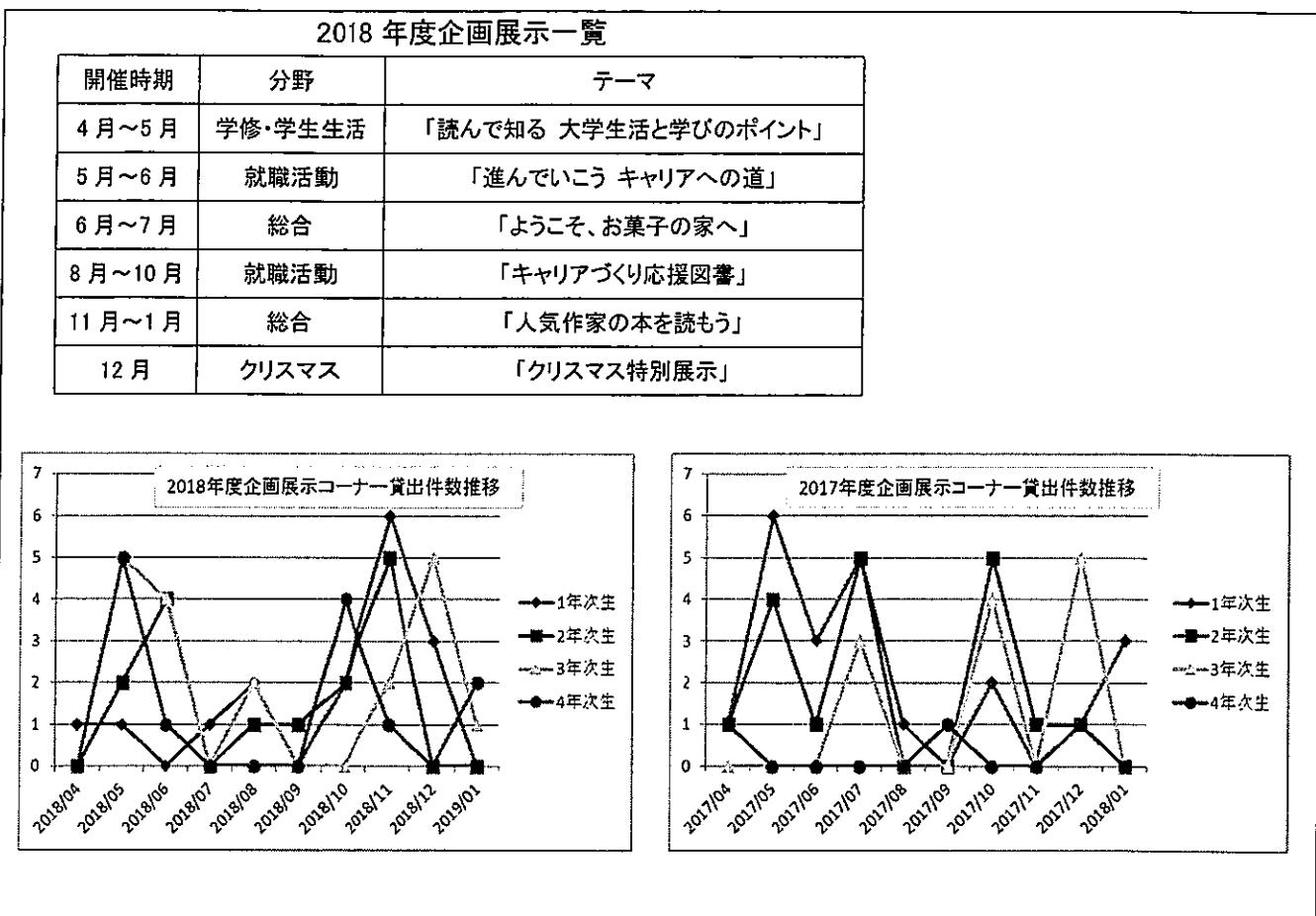
- (1) 英語観光学科では英語多読図書について、心理こども学科では絵本について、貸出件数の数値は減少傾向にあり、9月以降の全体の貸出件数が減少した。((表3)参照) 館外貸出よりも館内利用が進んだことが一因と推定できるが、その指標が設定されていない。
- (2) 5つのイベントについて参加人数が伸びず、学生全体に対して学修への効果が伝わりにくかったことが予想できる。

#### A【改善策】

- (1) 館内利用の活性化を計測するため、図書の館内利用を数値化する方法を検討する。
- (2) 学生の図書館利用を促進するため、英語多読に関する相談や情報交換ができるイベントや、絵本読み聞かせ会やブックトーク等、より学修に直結したイベントを実施する。

下記表とグラフの貸出件数は、本学学生の2018年4月1日～2019年1月31日、2017年4月1日～2018年1月31日の統計数値である。

(表1)



(表2)

イベント名	期間	人数	学修成果へのたらきかけ
図書館「お菓子の家」プロジェクト	5月16日～10月25日	多数 (来館時 随時参加)	① 学生が乳幼児の発達や気持ちを考え理解を深める機会となった。 ② 「母と子のふれあいひろば」で活用された。(11月15日、12月13日) ③ 乳幼児の反応を見て、学生が「お菓子の家」に工夫を加える実践の場となった。
新書の海へ、潛ぎ出そう！	5月15日～7月31日	6	① 4名の学生が学修に直接関連した内容の新書を購入希望し、利用した。 ② 参加学生が新書を検索する新しい方法を知ることができた。 ③ 学修分野に関連した学術的な内容が分かりやすく書かれた新書について学生に知らせることができた。 ④ 新書について周知できた結果、貸出件数は前年度の3倍となった(16冊→48冊)。
図書で旅する世界の街角	9月26日～11月29日	5	参加学生から「図書館をたくさんうろうろしたのが初めてだった」「絵本・多読本の種類の多さに驚いた」等のコメントが寄せられ、館内の図書・資料に意識を向けるきっかけを作った。
1・2年次生に読んでほしい本	10月9日～11月29日	展示のみ	これまで読んでいなかった図書について認識するきっかけとなった。
図書館でクリスマスのしおりを作ろう	12月3日～12月21日	0	クリスマスにちなんだモチーフを配したしおりを作成し、クリスマスの意味を考える機会とする。

(表3) 貸出件数推移

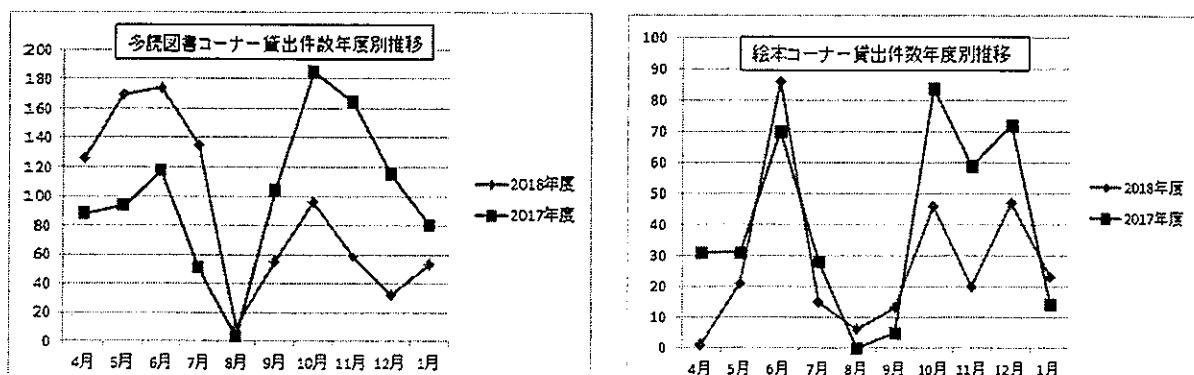
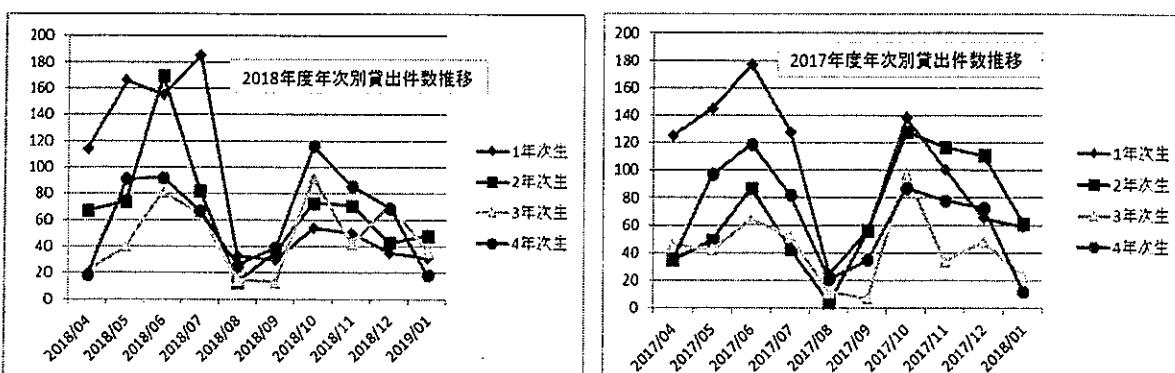
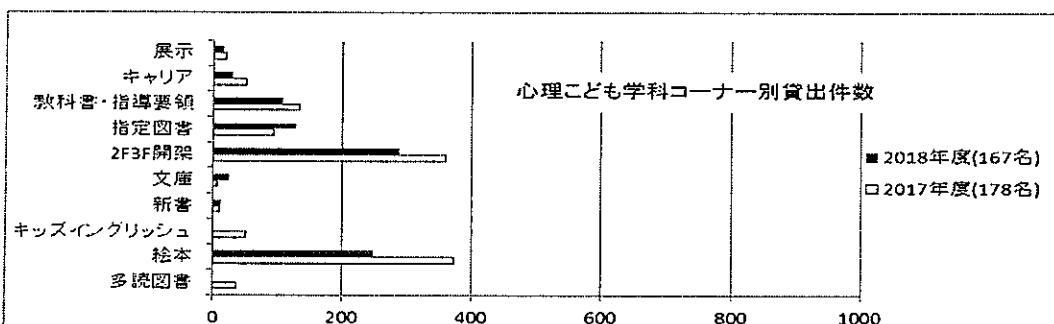
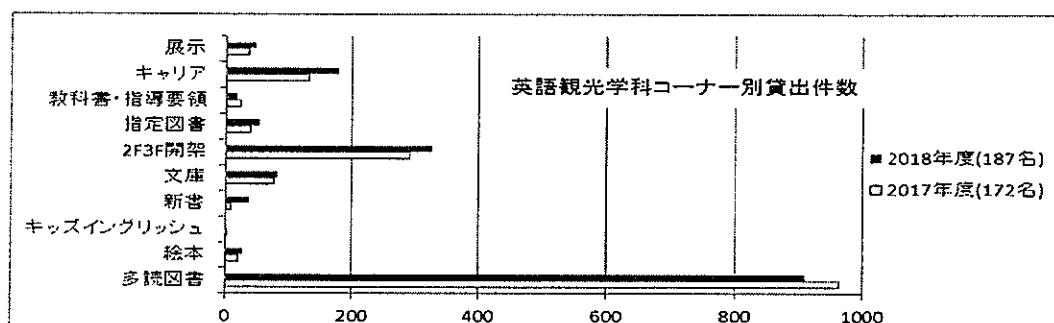
コーナー別貸出件数比較(期間：各年度 4月1日～1月31日)

英語観光学科

	多読図書	絵本	キッズイング リッシュ	新書	文庫	2F3F開架	指定図書	教科書・指 導要領	キャリア	展示
2018年度(187名)	910	28	1	37	83	327	54	18	178	48
2017年度(172名)	963	20	2	9	77	291	40	24	132	36

心理こども学科

	多読図書	絵本	キッズイング リッシュ	新書	文庫	2F3F開架	指定図書	教科書・指 導要領	キャリア	展示
2018年度(167名)	0	250	2	12	25	289	129	108	30	15
2017年度(178名)	37	374	50	10	6	361	94	133	50	19



## 1 4. 生涯教育委員会・地域交流委員会

### P 【目標】

基準9 - ③

本学の社会連携・社会貢献において多方面の学外組織や団体と連携を図りつつ、教育研究及び学修成果を社会に還元する。

### D 【現状説明】

大学の地域における役割として、地域連携や地域貢献が求められる。そのため、組織としての大学は、その環境作りと大学教員の高い意識が必要である。本学における現状は、多忙な業務の中、教員による活動が一部に限定されている。この現状を少しでも改善すべく、本委員会は、過去3年間に渡り啓発に取り組んでいる。その上で、各教員の社会連携・社会貢献に関する報告をまとめ、開示している。

本年度目標の「どのような組織との連携か」を明確にするために、報告項目に連携先項目を加えた。その上で、本学の資源である各教員の専門別に社会連携・貢献の分析をおこなった。分類と連携の項目は次の通りである。

大学の持つ資産として1から7の領域に分類した。以下が分類の項目である。

#### 領域

1. 宗教
2. 語学
3. 観光
4. 教育
5. 心理
6. 学修成果①学修成果/クラブ②学修成果/観光③学修成果/幼児教育④学修成果/教育⑤学修成果/語学⑥学修成果/ボランティア
7. その他

統いて、連携組織・団体を以下の分類とした。

#### 連携組織・団体

1. 行政
2. NPO
3. 教育機関
4. 一般法人
5. 一般団体
6. 地域コミュニティ
7. メディア（広報）
8. その他

報告は、春学期・秋学期の2度の集計を踏まえ、教授会で発表した。

### C 【点検・評価】

今年度の目標は、本学の資源が有効に發揮できているのかを焦点に、どの分野との連携・貢

献がなされたのかをチェックし、十分に本学の特色が活かされたのかを考察することが点検、評価項目の一つである。報告結果を踏まえ、次年度以降の地域連携・地域貢献に取り組みたいと考える。

2018年度の成果（資料）は、在籍学生数354名に対して延べ人数680名（前年477人、対前年比142%）の参加となり、1人1.9回の実績となった。しかし、参加案件数は39件（前年59件、対前年66%）となる。集計方法を今年度変更しているために数値を比較できない項目もある。

各分野に整理すると「領域分類」で73件となり、特に学修成果は28件で全体の38%を占めた。次に教育関連の12件17%、観光6件8%、心理6件8%、語学1件1%となり宗教は0件となった。

「連携組織・団体」では、行政が一番多く25件45%となり、地域コミュニティ12件22%、教育機関8件14%、一般団体4件7%、一般法人・メディア・その他が各2件で4%となった。

教員による連携・貢献は一部の教員に偏る傾向にある。社会連携・社会貢献が十分でないといえる。統計の取り方も、教員自らの社会連携・社会貢献という観点で比較していきたい。一方、学生数が少ないにも関わらず、学生の社会連携・社会貢献への参加率が高く、評価できる内容である。これら学生の活動の裏には、担当教員の指導・サポートがある。日頃より、学生と向き合う本学の教育方針が發揮されていると評価する。

#### A【改善策】

教員の社会連携・社会貢献を成果あるものにするためには、より一層の環境整備が求められる。この環境整備は大学経営にも関わる項目である。本委員会は、今後とも啓発活動を継続し、大学教員としての知の資源を社会に貢献できるように努めたい。具体的には、年度末の教員活動報告における学科長面談にて協力を依頼する。さらに、時間的な環境整備、評価の環境整備など具体的な方策を大学運営に求めていきたい。

次に学生の社会連携・社会貢献に関しては、教務委員会との協議の上、単位認定など教務的施策の導入により、参加へのモチベーション向上を図りたい。

## 15. 英語観光学科

### P 【目標】基準4-④

自文化及び異文化について主体的に研究する機会を授業内外で設け、学生の自文化・異文化への関心を高め、理解を深める。

### D 【現状説明】

自文化及び異文化への関心・理解度の変化を確認するために、各教員が学期の最後に担当科目履修者対象にアンケートを実施することになった。当該学期の学修を通した自文化・異文化に対する関心の高まり及び、それらに対する理解の深まりについて問うことを基本とし、それ以外は各科目の特性に応じてアレンジを加えたアンケートを実施した。

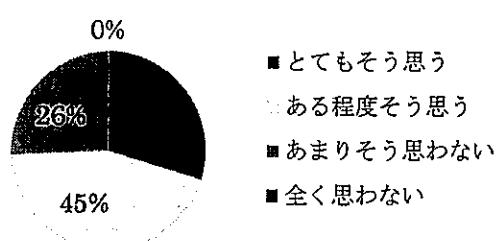
### C 【点検・評価】

アンケートを実施した科目は7科目、全体で最大125名分の回答が得られた。

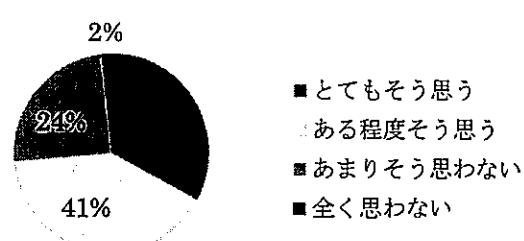
日本文化・異文化共、とても関心が高まった・理解が深まったという回答がそれぞれ約3割あった。「とてもそう思う」と「ある程度そう思う」とを合計すると、日本文化については7割強、異文化については約8割がより関心を持ち、理解を深めたと答えている。

自文化・異文化に対する関心・理解度の変化

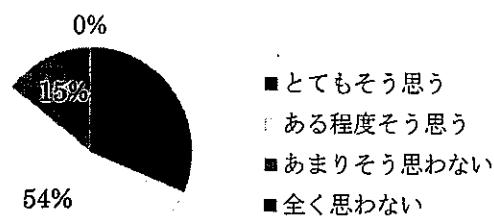
日本文化に対する関心が高まった



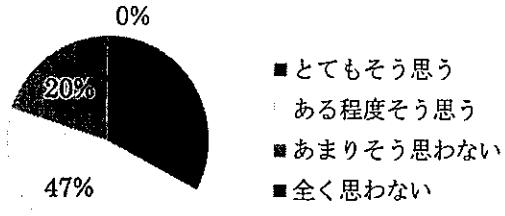
日本文化に関する理解が深まった



異文化に対する関心が高まった



異文化に関する理解が深まった

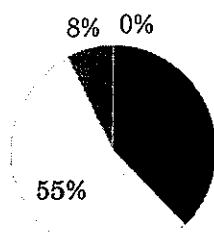


なお、「日本文化論」(2年次・必修・51名回答)においては、DVD鑑賞をしながら古典芸能について学び、履修学生の意識が大きく変化していることが分かる。日本文化に対する関心や理解度の向上(9割以上が向上)は当然の結果とも言えるが、異文化に対しても8割強の履修者が関心・理解度を高めており、異文化理解をする上で自文化を理解することが重要であることを改めて確認した。

#### 「日本文化論」の授業を通した自文化・異文化に対する関心・理解度の変化

日本文化に対する関心が高まった

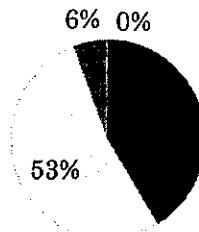
(日本文化論)



- とてもそう思う
- ある程度そう思う
- あまりそう思わない
- 全く思わない

日本文化に対する理解が深まった

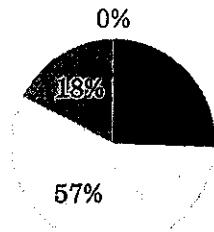
(日本文化論)



- とてもそう思う
- ある程度そう思う
- あまりそう思わない
- 全く思わない

異文化に対する関心が高まった

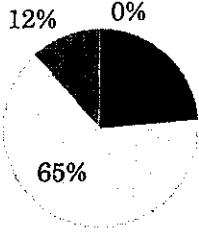
(日本文化論)



- とてもそう思う
- ある程度そう思う
- あまりそう思わない
- 全く思わない

異文化に対する理解が深まった

(日本文化論)

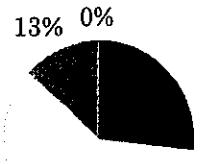


- とてもそう思う
- ある程度そう思う
- あまりそう思わない
- 全く思わない

以下は異なる視点から質問項目を追加したReading 201(1年次・必修・15名回答)の結果である。英語・日本語という言語そのものよりも「英語学習」、言語よりも「文化」に対して関心が高いことが分かる。

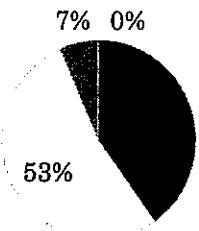
#### 英語・文化に関する意識

英語に対する関心が高まった



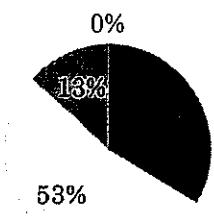
- とてもそう思う
- ある程度そう思う
- あまりそう思わない
- 全く思わない

英語学習に対する興味が高まった



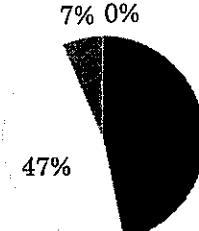
- とてもそう思う
- ある程度そう思う
- あまりそう思わない
- 全く思わない

英語と日本語の比較は興味深い



- とてもそう思う
- ある程度そう思う
- あまりそう思わない
- 全く思わない

英語圏文化と日本文化の比較に対する  
関心が高まった

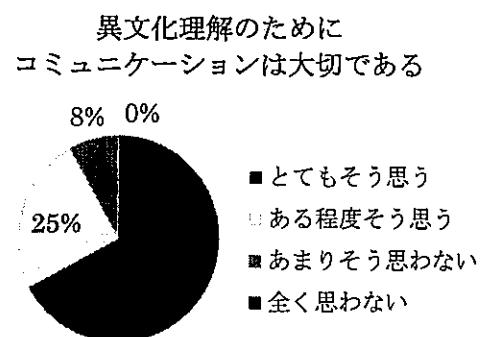


- とてもそう思う
- ある程度そう思う
- あまりそう思わない
- 全く思わない

## A 【改善策】

授業を通して、自文化・異文化に対しての関心・理解度は概ね向上していると言えるが、1年次生の中には、「文化」の定義に戸惑う者も見られ、この抽象的な概念についてのさらなる教育・啓発の必要性がある。

言語よりも文化に対する関心の高さが観察されたが、「異文化理解のためにコミュニケーション（又は英語）」が大切だと思うかどうかについては、67%が「とてもそう思う」と答え、「ある程度そう思う」を足すと92%がその重要性を認識している（61名回答）。文化を理解するためのツールとしての日本語・英語（その他外国語）の使用を積極的に促していくよう、今後の教育において工夫を重ねていく。



## 1.6. 心理こども学科

### 1. P【目標】基準4-④

学生の主体的参加を促す授業内容や授業方法を工夫する。授業アンケート等を通して学生の実態を把握し、さらなる改善を図る。

### 2. D【現状説明】

1年次生39人に、取得したい免許状や資格についてアンケートを実施したところ、保育士37人(94.8%)、幼稚園教諭35人(89.7%)、小学校教諭11人(28.2%)、認定心理士23人(59%)等であった。<2018年4月12日実施、複数回答>

このように、保育・教職を目指して入学してくる学生が多いのが、心理こども学科の特長であり、保幼に関しては昨年度より増加傾向にある(昨年度は保育士82%、幼稚園教諭84.1%)。アンケートには、「保育士の資格を取りたいと思って海星に入学した」「母が幼稚園の先生をしていたし、子どもが大好きだから」「担任だった先生のような先生になりたいから」等の回答があった。

しかし、先生としての資質があり努力を続ける学生がいる反面、学修や実習に対して自覚と熱意が足りない学生がいるのも現状である。

今年度も教員側の一方通行の授業ではなく、学生の意見を取り入れた双方向の授業にすることが学修意欲を高めることにつながると考え、授業アンケートを実施した。

中期に行った1回目の結果をもとに授業改善を図り、授業最終日等の2回目のアンケート結果と比較し、次年度に向けての改善策を考察した。

### 3. C【点検・評価】

各教員が2回の授業評価アンケートを比較・考察した8科目は、次のとおりである。

- (1) 1年次春学期「科目A」担当A
- (2) 1年次秋学期「科目B」担当B
- (3) 2年次秋学期「科目C」担当C
- (4) 2年次秋学期「科目D」担当D
- (5) 2年次秋学期「科目E」担当E
- (6) 2年次秋学期「科目F」担当F
- (7) 3年次秋学期「科目G」担当G
- (8) 3年次春学期「科目H」担当H

#### (1) 1年次春学期「科目A」担当A

##### D【現状説明】

1年次春学期、木曜日1限の授業である。4月12日実施の進路等に関するアンケートによると、全員が保育士資格や教員の免許状取得を希望していた。

また、質問や要望の欄では、次のような記述があり、前向きに授業に臨もうとする手応えを感じた。

- ① 保育士や先生にとって言葉づかいはとても大切なので、しっかり正しい言葉づかいを身に付けたい。
- ② 授業に真剣に取り組むので、これからよろしくお願ひいたします。
- ③ 文章を書くのが得意ではないので、予習・復習をして頑張りたいと思う。
- ④ 敬語の使い方がしっかり身に付けられるよう頑張る。
- ⑤ これから、たくさんのこと先生から学んでいきたい。

このような意欲を持っている学生を、授業に引き付ける手立ての一つとして、「美し

い日本語」の学びの中に「絵本」を取り入れることにした。

また、その日の授業の流れが分かるように、授業予定を黒板に掲示した。「発声トレーニング」「テキスト〇ページ」「ミニテスト」「練習問題」「絵本の紹介」等である。

さらに、毎回、ペアワークや発表を取り入れるとともに、授業への要望・質問、資料への感想等は、次回の授業で口頭説明をしたり、プリントを配布したりした。

#### C [点検・評価]

##### <アンケートの実施>

6月7日と7月26日に、授業アンケートを実施した。結果は次のとおりである。

アンケート項目	1回目 38名 (6月7日)	2回目 38名 (7月26日)
1. 話し方や説明の仕方		
(1) わかりやすい	35 (92.1%)	33 (86.9%)
(2) どちらかというと、わかりやすい	3 ( 7.9%)	5 (13.1%)
(3) どちらかというと、わかりにくい	0 ( 0%)	0 ( 0%)
(4) わかりにくい	0 ( 0%)	0 ( 0%)
2. パワーポイントのスライドの文字の大きさ、スライドの速さ		
(1) これくらいの大きさや速さでよい	24 (63.2%)	25 (65.8%)
(2) どちらかというと、これくらいの大きさや速さでよい	6 (15.8%)	6 (15.8%)
(3)-1 文字をもっと大きくしてほしい	3 ( 7.9%)	1 ( 2.6%)
(3)-2 もっとゆっくり進めてほしい	4 (10.5%)	5 (13.1%)
(4) 文字を大きくし、スライドをゆっくり進めてほしい	1 ( 2.6%)	1 ( 2.6%)
3. 授業の進め方		
(1) これくらいの速さでよい	28 (73.7%)	30 (78.9%)
(2) どちらかというと、これくらいの速さでよい	7 (18.4%)	6 (15.8%)
(3) どちらかというと、もっとゆっくり進めてほしい	3 ( 7.9%)	2 ( 5.3%)
(4) もっとゆっくり進めてほしい	0 ( 0%)	0 ( 0%)
4. 授業の内容①		
(1) 今後、とても役に立つと思う	25 (65.8%)	30 (79.0%)
(2) 今後、役に立つと思う	13 (34.2%)	8 (21.0%)
(3) 今後、少し役に立つと思う	0 ( 0%)	0 ( 0%)
(4) 今後、役に立つとは思わない	0 ( 0%)	0 ( 0%)
5. 授業の内容②		
(1) とても関心を持つことができる内容である	25 (65.8%)	31 (81.6%)
(2) どちらかというと、関心を持つことができる内容である	13 (34.2%)	7 (18.4%)
(3) どちらかというと、関心を持つことができない内容である	0 ( 0%)	0 ( 0%)
(4) 関心を持つことができない内容である	0 ( 0%)	0 ( 0%)
5. 印象に残った授業や要望（下記）		

##### <1回目のアンケートより「印象に残った授業や要望」>

###### (1)今までの授業で心に残っていること

① ただ聞いているだけの授業ではなく、発声トレーニングなど実際に自分が発音したり、友人とペアワークをしたりして、授業に集中できる。また、ペアワークすることにより、自分はどれだけできているか、他の人はどんなことを考えているのかを知ることができる。

② 絵本の中には、子どもに向けたものばかりでなく、深いメッセージが込められているものがあることが印象に残り、これからも様々な絵本を読んでみたいと思った。

③ 敬語について学んだこと。今まで間違った使い方をしていたと授業で気づき、普段の生活で正しい言い方ができるようになった。

#### (2)要望

① 人前で話すことが苦手なので、発表やプレゼンテーションの機会を何回か増やしてほしい。

② 答え合わせの時は、もう少し時間を持ってほしい。

#### (3)今後の自分の取り組み

① 将来必ず役に立つと思うので、集中して授業を聞きたい。

② 教育者に限らず、社会に出る上で大切な内容ばかりなので、確実に自分のものにしていきたい。

③ 敬語をマスターしたい。

#### <2回目のアンケート結果より「印象に残った授業や要望」>

① 普段、何気なく聞いたり使ったりしていた言葉が、実は正しくなかったり、造語であったりしたなど知らなかつたことが、知識となっていく感覚が面白かった。また、この授業で学んだことが、すぐに実生活で役に立つものでよかった。アルバイト先や母から、言葉づかいが変わったと言われてうれしかつた。

② 葉書や便箋の書き方、丁寧な文字の書き方などを学んだことがすごくよかつた。テストの時には、丁寧に書くことは難しいが、今後も字に気を付けて過ごしていきたい。

③ 絵本の読み聞かせと発声練習の時間が好きだつた。絵本はとても興味深く、どれも心に残る内容だつた。1限の授業だったこともあり、発声練習は目覚ましに丁度よかつた。また、敬語表現などはアルバイト先にも使えるので、自分の表現を見直す機会となつた。

#### <日本語テストの実施>

同じ問題で2回実施し、36名の結果を比較した。1回目は4月12日、2回目は8月2日である。問題数は45問（45点満点）であり、敬語の使い方や四文字熟語等授業で取り上げたものも含まれている。

1回目の総得点は1062点であり平均は29.5点、最高点は41点、最低点は16点であった。2回目の総得点は1247点であり平均は34.6点、最高点は42点、最低点は24点であった。36名中33名が2回目の得点の方が高くなつておつり、得点差が一番大きかつたのは+14点の30点であった。

#### (1)効果が上がつてゐる事項

① 設問1~5で(1)(2)を合わせると1回目も2回目も100%が3項目あるなど、評価は良好であった。特に「授業の内容①②」から、「役に立ち、関心のある授業内容」であったと評価できる。

② 「生きる」「命」「死」等をテーマに、心に響く絵本を選び、「たいせつなこと」「みんなみんなぼくのともだち」等14冊の読み聞かせを行つたが、授業に関心をもつだけではなく、絵本の深い世界を知るきっかけにもなつた。将来、役立つことが期待できる。

③ 「日本語テスト」の結果を比較すると、2日目の総得点が185点高くなつてゐることから、授業の成果が表れています。

## (2)改善すべき事項

- ① 発声トレーニング、絵本の紹介も含めて、90分の授業形態・授業方法を検証する必要がある。
- ② 準備学修の内容が不十分であったので、再考する。
- ③ 敬語など言葉の学修だけでなく、文章を書く時間を増やす必要がある。

## A [改善策]

- ① 90分の授業内容の充実を図る。
- ② 「日本語表現力」を高める効果的な準備学修を設定する。
- ③ テーマに応じた小論文を作成することで、文章力を培う。

## (2) 1年次秋学期「科目B」担当B

### D [現状説明]

教科書が変わり、さらに使いやすくなっていたので、教科書に沿って進めていったが、実際体験やDVD視聴を増やすことによって理解を深めるということも毎年の意見としてあり、できるだけ今年度も授業に取り入れていくようにした。

また、項目ごとの理解度を見ながらの授業の進め方についても、意識しながら進めていった。

上記のことを踏まえながらその改善に努められるよう、11月と1月の2回アンケートを実施した。評価対象科目は「乳児保育」、対象学年は1年次生（34名）である。

## C [点検・評価]

### <アンケート結果>

#### 1. 「乳児保育」の授業の内容は、理解できましたか？

	11月（授業中間時34人）	1月（授業終了時31人）
(1) 良く理解できた	20人	18人
(2) どちらかといふと理解できた	13人 [ 97 % ]	13人 [ 100 % ]
(3) どちらかといふと理解できなかった	1人 [ 3 % ]	0人
(4) 理解できなかった	0人	0人

#### 2. 授業の進め方で、話し方や説明の仕方は分かりやすいですか？

	11月（授業中間時34人）	1月（授業終了時31人）
(1) 分かりやすい	31人	29人
(2) どちらかといふと分かりやすい	2人 [ 97 % ]	2人 [ 100 % ]
(3) どちらかといふと分かりにくい	1人 [ 3 % ]	0人
(4) 分かりにくい	0人	0人

3. DVD 視聴、見学、事例、資料などが授業理解に繋がっていますか？

	11月（授業中間時34人）	1月（授業終了時31人）
(1) 繋がっている	32人	29人
(2) どちらかというと繋がってがっている	2人 100%	2人 100%
(3) どちらかというと繋がっていない	0人	0人
(4) 全然関係ない	0人	0人

<アンケートの考察>

⑦ 授業の理解度については、実際のところごく僅かに理解できていない学生もいたが大方の学生が理解を示している。これは、試験の結果にも表れていた。

この要因としては、毎回の授業時に、振り返りの時間を取りっていたことも理解度を増した要因であると考えられる。

DVD 視聴、見学、事例、資料等の提示によって、理解度が増していることも、アンケート結果より、学生が実感していることが推察できる。

① 授業全般についての感想、要望については下記のような意見があった。

- ・授業が分かりやすく（説明が分かりやすい）、楽しかった。
- ・ビデオ視聴が分かりやすかった。
- ・DVD 視聴で、乳児の可愛さを実感できた。
- ・保育所見学で乳児に触れ合えたのが良かった。
- ・具体例が分かりやすかった。
- ・授業の中での乳児向けの歌や手遊びが楽しかった。
- ・保育士になるために大切なことがいっぱい、勉強になった。
- ・乳児がどういう成長発達をしていくかを知ることができた。
- ・乳児とかかわる機会がないので、とても勉強になった。
- ・勉強しようと思える授業だった。
- ・板書を消すのが早い時があった。
- ・板書にポイントが欲しかった。
- ・乳児の手遊びをもっと知りたい。
- ・将来に向けてしっかり学習していきたい。
- ・眠い時もあったけど乳児について学べた。
- ・まとめのプリントが分かりやすかった。
- ・夢が現実味を帯びてきた。
- ・母親になった時知っておいてよかったと思えることばかりだった。

(1) 効果が上がっている事項

⑦ テキストに書いてあることや話の理解を深めるために、話をした後必ず実際の姿を見せるようにしたり事例をあげたりした。それが分かりやすく、視覚によって繋がったと評価できる。

⑦ 映像だけではなく、実際に乳児に触れる機会を設けたことも、乳児への理解に繋がっている。

⑦ 教科書とは別のグラフなどの資料を読み解いたり、事例を通して考えたりしたことでも、グループワークで考える機会になり、深く理解できる要素となったと思われる。

⑤ 実際の乳児保育を行う場合の乳児が喜ぶ手遊びや歌、手作りおもちゃの提示により、保育の楽しさも実感できたのではないかと思われる。

⑥ どの項目の理解ができたか、できなかったかというアンケートも今回実施したので、「乳児の発達過程」や「乳児保育の大切さ」についての理解はできていると推察できた。一方で、「乳児保育の歴史的変遷」等はあまり興味がなく理解しにくかったというのが分かった。

### (2) 改善すべき事項

⑦ アンケートでは、乳児のことを理解し、発達段階や乳児保育の重要性を理解できたと実感しているような意見が多くみられるが、実際には、30%の学生は復習課題やテストなどで、理解できているのが分かるが、特に36%の学生が、理解が不十分と思われる。そのためどうすれば、重要なことをしっかりと頭に入れて理解が深められるか、課題の出し方や理解度チェックをどうするか検討しないといけない。

### A [改善策]

- ⑧ 実際に乳児に触れることやDVD視聴、事例をあげること、乳児のかわいさ、乳児保育の楽しさを伝えることは、引き続き来年度も取り入れてしていくこととする。
- ⑨ 毎回授業の振り返りの時間を取っていたが、復習プリントを作り、準備学修として具体的に行い、理解度を増すようにする。
- ⑩ 最後にまとめのプリントを作り復習していたが、授業での項目ごとにまとめて、その都度振り返り学習ができるようにする。
- ⑪ 来年度から、「乳児保育Ⅰ」と、より実践向きの「乳児保育Ⅱ」に分かれるので、後半焦りながらしていた授業を項目ごとに時間をたっぷりと使いながら、一つ一つの項目をしっかりと理解できるようにしていく。

### (3) 2年次秋学期「科目C」担当C

#### D [現状説明]

「初等音楽3」は、保育士資格・幼稚園教員免許状取得のための選択科目である。2年次生秋学期に設定され、2年次40名中16名、3年次1名、4年次1名、全19名が受講している。下記設問の

- ① 「ピアノを弾く」楽しさを感じていますか？
- ② 「歌を歌う」楽しさを感じていますか？
- ③ 「音楽」の楽しさを感じていますか？
- ④ 「表現すること」の楽しさを感じていますか？

に対し、「1. とても感じている」「2. 少し感じている」「3. あまり感じていない」「4. 全く感じていない」の4段階で回答を求めた。アンケート実施日は、8回目の授業日である11月17日と15回目の授業日の1月29日である。

#### C [点検・評価]

1回目（11月17日）

2回目（1月29日）

	1	2	3	4
①	8 (53)	5 (33)	2 (13)	0 (0)
②	5 (33)	7 (47)	3 (20)	0 (0)
③	7 (47)	6 (40)	2 (13)	0 (0)
④	5 (33)	10 (67)	0 (0)	0 (0)

	1	2	3	4
①	9 (47)	7 (37)	3 (16)	0 (0)
②	8 (42)	11 (58)	0 (0)	0 (0)
③	11 (58)	7 (37)	1 (1)	0 (0)
④	9 (47)	10 (53)	0 (0)	0 (0)

結果に大きな差異は認められないが、「歌を歌う」「音楽」「表現すること」に対しては、楽しさを感じる度合いは強くなっている。「ピアノを弾く」ことに対してはマイナスになっている。原因は定かではなく、あくまでも推測にすぎないが、ピアノの技術修得はかなりの根気を要し、努力がすぐに結果として実感できないためだと考えられる。初等音楽3の科目としては、「ピアノ」という楽器の技術の習得ではなく、「表現力」の習得に重点を置いているため、④の「表現すること」の項目の値が上がったことには大きな成果を感じている。

#### A [改善策]

自由記述においては、ピアノの曲が難しい、簡単な曲にしてほしい、弾き歌いのコツを教えてほしい、ピアノの表現方法を学びたい、もっと童謡の曲がしたいという記述の他、今の授業が気に入っている、音楽会が楽しみである、歌い切ることの大切さを学べたなど、授業に対する意欲的な姿勢を感じ取ることができた。簡単な曲の要求も、決して安易な授業を求めてはいるわけではなく、自分自身の達成感や技術向上への積極的な態度の表れだと読み取ることができる。現在も一人ひとりの音楽技術や意欲を考慮して課題を提示しているつもりだが、改善策として、各人が思う「簡単な曲」も課題曲に加え、全員が達成感を得られるような課題を研究し提供していきたい。

#### (4) 2年次秋学期「科目D」担当D

##### D [現状説明]

履修者は保育・幼稚園・小学校教職を希望するものが受講している。教育系の中でも教育方法論は、学生にとっては概論、原理などと同様に親しみにくい学問分野かもしれない。そのため、少しでも興味関心を高めるために、事例を多く取り入れて書かせることを中心にして進めてきた。

##### <アンケートの実施>

(アンケート ※中間期11月⇒M 最終期1月⇒Eと表示 サンプル数N=31)

###### 1 授業内容について

(1) 説明はわかりますか。

アよくわかる イ何とかわかる ウあまりわからない エわからない(理解できない)

ア M27 E25 イ M4 E6

特記事項なし

##### <点検・評価>

何とかわかると回答した中には、ほとんど理解していない学生もいる。特に、後半は学習指導要領をもとに指導目標や内容の説明が多く、学生にとって関心を持ちにくい分野だったかもしれない。しかし、それは指導者にとってあらかじめ予想されたことであるので、指導の重点を絞り込むなどの工夫に課題があったと考えている。

指導案をもとに、良い指導案とあまりよくない指導案を対比しながら解説したときの授業後の感想は、15回の授業の中で最も良い反応だった。教材観における教材解釈の浅い深い教師の発問の選択肢が大きく変わること、その教材の値打ちに対して今、目の前にいる子どもたちの教材への実態をしっかりと児童観に書くこと。最後に教材観と児童観のギャップをどのような手立てをもって埋めていくのかを指導観できちんと記していく大切さを比較学習で経験させようとした。

15回の授業のうち前述の実践は何とか関心意欲を高めることができたかもしれないが、解説・説明に終始したときの授業は、退屈させてしまったと大いに反省している。

(2) パワーポイント 左欄の青字は写す 右罫線欄はホワイトボードや補足説明を書き込むスタイルで授業を進めた。

ア よくわかる イ 何とかわかる ウあまりわからない エわからない(理解できない)

ア M26 E27 イ M5 E4

<改善してほしいことがあれば書いてください>

M 書く時間が足らない ホワイトボードのインクがうすくて見にくい

E 特になし

#### <点検・評価>

少数ではあるが、まともな筆記用具を持たずに大学に来る学生もいる。授業中の発言も大切ではあるが、覚えることが多い学問の一つでもあるので、書いて覚えるを中心据えた。書き込み資料として与えたパワーポイント3段配布資料が、真っ黒になるまで視写、聴写、自分の考えに分けて書かせた。途中でペンが止まってしまう学生も見受けられたが、教育方法論の基礎としての知識を知らせる上で、目的を持って書かせることは効果があったと考える。

(3) 授業内容は今後の自分に役に立つことがありますか。

ア 大いにある イ あるかもしれない ウあまりない エあるとは思えない

ア M27 E27 イ M4 E4

<改善してほしいことがあれば書いてください>

特になし

学問がすぐに現場の実践に結びつくとは限らない。また、「わかる」と「できる」には表現できないほどのギャップがあるのも事実である。学生が教育方法論15回の中で、近未来の自分に何をどう生かせるのか定かではないが、「わかる」が少しでも多くなることで、今後の自分に役立てたいと考えてくれることを願っている。

2 アンケートより ふりかえり

15回を振り返って、以下のような感想、質問、要望が得られた。

① 良かったこと

- ・板書とパワポの組合せで理解が深まる。
- ・心理学を切り口にした教育方法の授業は現場で生かせる。
- ・事例がテーマごとにフィットしているので将来の参考になる。
- ・考える時間が設定されているので良い。

② 改善希望

- ・パワポの積み残した資料はいつするのですか。
- ・前にも聞いた事例(教育心理学)を二度目に聞くと、新鮮さがない。
- ・書くことが多すぎて余白が小さかったので、苦労した。

#### A [改善策]

アンケート結果より、今回は「書くこと」を重視して進めた。ただ、視写、聴写等の書くことに時間を取られ、自分の考えをまとめるために「書く」時間を十分に確保できなかつたことが今後の大きな課題と考えている。

(5) 2年次秋学期「科目E」担当E

D[現状説明]

<前年度の自己評価からの課題>

平成29年3月告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の実施を受け、乳幼児の発達を3段階に分けた新たな内容で授業を行う。文部科学省がモデルカリキュラムで示したように保育指導力の基礎に重点を絞り、演習を多く加える必要があった。

<課題をもとに授業改善したこと>

- 1, シラバスの内容を改善し、文部科学省の認可を得た内容での授業を行う
- 2, 事前・事後学修の確認のため、自修シートと進捗状況を示す学修計画表を使用して何を学んでいるか等の授業目標を自分で意識して受講させるようにした。
- 3, アクティブラーニングの一環として、絵本の読み聞かせを保育の核とした教材のリサーチを加え、担当が編集し実習に生かせるデータ集を作成した。

C[点検・評価]アンケート中間調査 2018年11/14、31名、最終調査 2019年1/23、34名

項目	そう思う		思う		あまり思わない		思わない	
	中間	最終	中間	最終	中間	最終	中間	最終
① 授業を通して 幼児の言葉の発達のイメージが具体的に把握できた	16	21	15	13	0	0	0	0
② スライド表示のレジメやDVD視聴による講義や解説は 理解しやすかった	21	23	10	11	0	0	0	0
③ 豊かな言葉を育む歌や手遊びなどの習得に意欲的になった	16	16	15	18	0	0	0	0
④ 授業計画表への課題記入や、自修シート学修により、毎回の授業の要点や専門用語を理解した	9	12	22	22	0	0	0	0
⑤ 絵本データ収集(課外学修)では、多くの絵本を読み、関連する遊びを見付けることができた	10	15	19	16	2	3	0	0
⑥ 保育指導案立案のポイントを理解し実習において部分指導案を自分で作成することができる	9	8	14	22	8	4	0	0

- 1, 知識の定着に関する調査項目①の結果から、言葉の発達の理解が向上したと評価できる。
- 2, 授業で使用する教材と解説に対する調査項目②の結果から、理解のしやすさについて中間・最終評価どちらも同じ割合であった。
- 3, 言葉を育む保育の演習に関する調査項目③の結果から、最終評価で若干上昇した。言葉を育む多様な保育と多方向からのアプローチが理解され習得への意欲が向上したと思われる。また、教育実習が迫り必要感から意欲が増したことも合わせて考えられる。
- 4, 事前・事後学修に関する調査項目④の結果から、「そう思う」は向上したが、自ら本屋や図書館に出向き調査する意志や、保育教材としての意識、絵本やお話への興味関心度については、全体としてまだ意識の面で底上げが必要である。
- 5, 保育指導技術の調査項目⑤では、不安を抱いていた学生数が減少しグループでの保育案作成や模擬保育の実践、担当が作成した教材を通して「思う」評価が増えた。

<記述内容や要望>

**ア.模擬保育について**

- ・欠席があり、欠員のままでの実践が残念だった 2
- ・多くの手遊びを覚えることができた
- ・もう少し練習する時間をもちたかった 3
- ・初めてのことでの大変だった。本番で手遊びの歌の歌詞や動きを忘れた 5
- ・アドバイスをしっかり覚えておこうと思う 3
- ・緊張したが、皆の反応もよくうまく保育を進められた 5
- ・思っていたより難しいことがわかった。幼児を想定できなかつた 7
- ・小学校の指導法と違い過ぎて難しかつた
- ・楽しく!を第一に考え小道具にこだわった
- ・いろいろな教材や保育の展開方法を学べた 新しい発見があつた 4
- ・チームでの実施と一人での実施の難しさを感じた 2
- ・役割分担は、幼保に進む本人達の力にならず、小学校希望者がするのはおかしい

**イ.絵本データ集**

- ・がんばって調査してよかつた 3
- ・たくさん活用したい 19
- ・うまく探せず空欄で提出したが、内容を見て驚いた。探し足りなかつた 3
- ・絵本を主とした遊びの組み合わせがわかつた、保育計画に使うことができる 2
- ・見やすい、検索しやすい 3
- ・実習を楽しみに思える、もっとバリエーションを増やしたい 2

**ウ.保育指導案作成のコツ(領域「言葉」)**

- ・実際に作成するときに役に立つ 17
- ・いつも書くことに悩んでいたのでコツがわかつた 7
- ・絵本を読み聞かせるにしても環境を整えることの大切さがわかつた
- ・小学校低学年の指導に活用したい 2

(1)効果が上がっている事項

- 1, 言葉の発達の理解(定期テストで昨年よりも得点が上昇)
- 2, 模擬保育とデータの完成によって、領域「言葉」の内容を主とする具体的なイメージがもてるようになってきていること(定期テストで指導案の一部作成を課すが得点上昇)

(2)改善するべき事項

- 1, 模擬保育と課題発表の実践方法
- 2, 領域言葉での専門用語や、配慮事項の文章表現についての理解度を上げること
- 3, 模擬保育発表に対する評価をループリックのように指標を設けるべきか検討すること

A[改善策]

- 1, 他大学での授業方法を学び、授業方法の改善を図る。
- 2, 関連科目教員との連携を図り、特に力を入れて取り組むべき事項を授業に反映する。
- 3, 模擬保育の準備について2ヶ月の時間猶予をもち、事前事後学習としても位置付けたが学生が自動的に活動したのは実践直前でありながら「準備不足」の反省が多かつた。本来は一人で実践るべき内容だが、授業時間内で履修者全員が行うことは困難である。模擬保育を15回の授業の前半にもつことは難しく、中間レベルでの発表事項と、後半レベルでの実践事項に内容をさらに分割する。(モデルカリキュラムでは理論のみで1単位、演習2単位なので、現状15時間に圧縮するのが難しくなってきた)

(6) 2年次秋学期「科目F」担当F

D [現状説明]

アンケートの結果を以下にまとめる。

① 第1回目のアンケート結果（回答者数31名）2018年11月15日実施

授業の理解度（1. わかった（51.6%） 2. まあまあわかった（45.1%）

3. あまりよくわからなかった（3.2%））

授業の内容（1. 満足できた（100%） 2. ちょっと物足りなかった（0%）

3. 物足りなかった（0%））

テーマについて（1. もっと知りたくなった（25.8%） 2. 興味を持てた（74.2%）

3. つまらない（0%））

教材・資料等は（1. わかりやすい（51.6%） 2. 普通（48.4%）

3. 不適切（0%））

授業中の環境は（1. 集中できる（80.7%） 2. 集中しづらい時がある（19.4%）

3. 劣悪（0%））

<アンケート自由記述欄>

- ・情報が多くて覚えにくい。覚えることが多い（2）
- ・同じ教材で勉強する事があり、知識になっている。
- ・たまに私語がある。たまにかなりうるさいことがある。（2）
- ・実習で受けられなかつたが、初めから受けたかった。
- ・たくさんの発見があり面白い。授業は楽しくわかりやすい。（3）
- ・一時間目、朝が早く、つらい。もう少しゆっくりすすんでほしい。
- ・自分たちで発表するので理解できた。
- ・たくさんの人たちのあらゆる視点が面白い。
- ・プリントをみかえしてもなかなか小テストの得点がとれない。
- ・小テストがあるのでしっかり復習する時間が嬉しく嬉しい。
- ・発表者のレジュメをOHCで写してほしい。
- ・しっかり覚えたい。
- ・発表レジュメが穴埋めでわかりやすい。

② 第2回目のアンケート結果（回答者数38名）2019年1月24日実施

授業の理解度（1. わかった（65.8%） 2. まあまあわかった（31.6%）

3. あまりよくわからなかった（2.6%））

授業の内容（1. 満足できた（94.7%） 2. ちょっと物足りなかった（5.3%）

3. 物足りなかった（0%））

テーマについて（1. もっと知りたくなった（50%） 2. 興味を持てた（50%）

3. つまらない（0%））

教材・資料等は（1. わかりやすい（76.3%） 2. 普通（23.7%）

3. 不適切（0%））

授業中の環境は（1. 集中できる（71.1%） 2. 集中しづらい時がある（26.3%）

3. 劣悪（0%））

<アンケート自由記述欄>

- ・学生の演習発表があり、他者の発表を聞いて勉強になった。良い経験になった（2）
- ・人にわかりやすく説明することや、レジュメの作り方を学ぶことが出来た。
- ・（座席が班ごとの指定であったため）座席指定したほうがよかつたかも。
- ・OHCの画面が小さすぎて見づらかった。レジュメとパワポがどこかわからない（2）

- ・学生の発表が聞き取れることや、発表レジュメが不十分だったりしてわからないことがあった。
- ・心理学についてもっと深く学びたいと思うようになった。来年も先生の授業がとりたい。(2)
- ・楽しい授業だった・わかりやすかった・伝言ゲームが面白かった。面白い、ためになる満足である。など(5)
- ・ありがとうございました。(6)
- ・人との関わり・脳や記憶のことを知ることが出来、勉強に反映するがあれば活かしたい。
- ・落としたら来年とれないと聞いて、ギリギリ頑張った。
- ・私語が多くかった気がする。(2)
- ・難しい内容が多かったが頑張った。ゼミこれからよろしくお願ひします。

#### C [点検・評価]

##### (1)効果が上がっている事項

二度のアンケートの結果を比較して、授業後半の「理解度」、「テーマへの興味」、そして「教材・資料への満足度」の項目において、1の回答数が増加、2の回答数が減少しており、学生からの評価が向上していることが示された。特にテーマへの興味は、初回のアンケートから数値が倍増していた。

また、自由記述で指摘されていた、発表者のレジュメをOHCで写してほしい、という点について、可能な限り実施した。その結果、2回目の調査で再度指摘した学生はいなかつた。しかしながら、スクリーンにレジュメを写した結果、文字が小さくて見づらい、という新たな問題点が二回目で指摘された。

##### (2)改善すべき事項

アンケート項目の中で、「内容への満足度」の評価で、1回目には0%だった「2.ちょっと物足りない」の回答が2回目のアンケートにおいて2名みられた。1回目の回答者数が31名、2回目の回答者数が38名、と、1回目のアンケート実施時には7名が欠席していたため、「ちょっと物足りない」と感じていた学生が欠席者の中にいた可能性もある。学習・発達論は、2年次生の授業であるが、上の学年の学生も参加しており、「ちょっと物足りない」と回答した学生のうち二名中の一名が他学科の三年次生によるものであった。上の学生の中には、既に何度か聞いた事のある内容であったかもしれないし、E T学科の学生にとっては、思っていた内容と違う、と感じたこともあったかもしれない。しかしながら、「ちょっと物足りない」と感じた理由について、自由記述欄に記載がなく、このアンケートの形式では不明瞭であることが示された。そのように感じた理由欄の設定などが課題である。

また、「環境への満足度」についても、第一回目に8割の学生が、「充分に集中できる環境」と答えていたが、第二回目のアンケートでは7割に減少し、「集中しづらい時がある」という回答が7%（4名）増加していた。自由記述欄にも、私語に関しては第一回目、第二回目でも指摘されていた。班ごとの発表ということもあり、班でのアクティビティや話合いなどもあったため、座席は班ごとに着席していれば可としていた。しかしながら、後方の座席に着席する学生が多くあり、前方の教卓にいては気が付かない私語も、教室の後方では行われていたかもしれない。全体にざわついたときには毎回注意をしていただけに、私語の指摘については、班の座席順を時折交代したり、後方の座席に、これ以上後ろに座らない、などのリミットを設けるなど、工夫ができたかもしれない。OHCの文字が小さすぎて見えない、とされる意見も、こうした対応で改善されるだろう。

#### A [改善策]

「学習・発達論」は、次年度、他の科目と統合されて、筆者の担当は今年度で終了する。しかしながら、「演習」の形をとる科目は他にもあり、この2年次生の「私語」は、春学期の他のクラスでも問題になっていたため、科目を超えてこの問題について改善策を考えることにする。

改善方策に次の二つを挙げる。

まず一つ目、次年度の当該学年の授業において、引き続き班による演習発表の形式を採用する場合、授業開始の第一回目で「私語」の問題をとりあげ、例えば班長による「私語」の自粛を意識化させる工夫や、「授業目標」として、授業の冒頭で毎回これを意識化させ、毎回の授業の終りに、「私語」が自粛されていたかどうか、自粛の為にどのようなことが必要かを考えさせるような振り返りの時間を持たせる、等の取り組みが考えられる。

そして、二つ目に、授業アンケートの項目、「内容が物足りない」「テーマがつまらない」「教材・資料が不適切」「環境が劣悪」に印をつけた場合に、そう思った理由について記載する欄を設定し、授業の改善に役立てたい。これは前年度にも改善策として挙げていたが、本年度の授業アンケートにそれを反映させるだけの余裕が無かった。次年度、この改善策を実現させるために、新年度が開始される前にこの準備を行っておく必要がある。

また、継続したいこととして、理解を深めるための小テストは各講義で来年度も実施し、ノートを取りやすい資料の開発を心がける。また、パワーポイントのスライドの進行速度も、ノートをとるのが遅い学生のために、予備の資料を複数準備して、周りに遠慮して書き写せないまま置き去りにされないように配慮したい。

以上のような工夫を加え、次年度も引き続き、学生の、授業への期待感に応えられるように努力したい。

#### (7) 3年次秋学期「科目G」担当G

##### D [現状説明]

実際に幼稚にかかわった経験があまりない学生が大半であった。そのため、第1に心身の発達や特性を学修させることを行った。また事例を取り入れた講義や、DVD視聴や意見交換（グループ討議）を実施し、自らが考える機会を多くした。また、復習を重視し数回前回の授業の内容の小テストを実施した。また理解を深めるために課題を出し、自ら学修できるようにした。しかし教諭になるための学習であるという意識を持つ学生が少なくグループ討議も意見を述べるのは一部の学生だけで進められていく状況であったり、指名しても考え方を述べることができなかつたりであった。教育実習を終えてからの授業では学生の意識が変化し、発表も充実した意見が聞かれるようになった。

#### C [点検・評価]

##### アンケート結果とアンケート者数

設問		1回目 42名		2回目 44名	
① 話し方や 説明の仕方	アわかりやすい	26	62%	23	52%
	イどちらかといふとわかりやすい	16	38%	13	30%
	ウどちらかといふとわかりにくい	0	0%	7	16%
	エわかりにくい	0	0%	1	2%

② パワーポイント の文字の大きさ スライドの速さ	ア大きさ・速さは丁度良い	4	9%	14	32%
	イ文字の大きさはよい	10	24%	19	43%
	ウ文字を大きくしてほしい	25	60%	9	20%
	エ速さをゆっくりしてほしい	3	7%	2	5%

③ 授業の進め方	アこれくらいの進め方でよい	15	36%	19	43%
	イどちらかというとこの速さでよい	19	45%	13	30%
	ウもう少しゆっくり進めてほしい	8	19%	8	18%
	エもっとゆっくり進めてほしい	0	0%	4	9%

④ 授業の内容	ア関心が持てる	30	71%	26	60%
	イどちらかというと関心が持てる	10	24%	14	30%
	ウあまり関心が持てない	2	5%	2	5%
	エ関心が持てない	0	0%	2	5%

#### <自由記述>

(1)今までの授業の中で、心に残ったこと

- |               |                       |
|---------------|-----------------------|
| ①保育形態について(9)  | ⑥幼児の対応・援助の仕方(10)      |
| ②リフレーミング(18)  | ⑦現場での実体験の話(2)         |
| ③遊びの中の学び(8)   | ⑧DVDの視聴や事例研究(11)      |
| ④幼児の発達と特性(6)  | ⑨グループ討議(2)            |
| ⑤教育要領を見ること(6) | ⑩子育て支援・カウンセリングマインド(2) |

(2)質問や要望

- ①パワーポイントをもっとゆっくり出してほしい(5)
- ②私語をしている人がいたら注意してほしい(1)
- ③プリントが多くすぎる(1)
- ④早口なので聞き取りにくい(2)
- ⑤マイクを使用してほしい(2)
- ⑥パワーポイントがあつてわかりやすかった(2)
- ⑦現場の話が聞けてよかったです(3)

(3)今後の自分の取組

- ①知識や技術を深めていく(11)
- ②実習に生かしていきたい(16)
- ③子どもを理解していきたい(2)
- ④就職に向けて休まず頑張る(23)

#### <アンケート結果>

2回のアンケートの結果を通して、学修内容に関心を持っていることが分かった。また、自由記述にあるように教員になるために知識や技術などの専門性を身に着けることの重要性を理解し始め、就職に向けて頑張る姿勢の表れであるとしていると思われる。授業は、パワーポイントとプリント及び教育要領、保育指針を中心に行なった。パワーポイント文字の大きさや速さにおいて1回目より2回目の方が満足している結果になった。授業を進める速さにおいても、実習の成果があるのか、授業の内容を理解していくことが容易くなってきていたことが分かった。

反面、後半授業内容において、理解度や関心がないなどの割合が増える結果となった。

前向きに、学修に取り組めないのは、理解がしにくい授業内容になっているかもしれない。

#### <改善すべき事項>

後半のアンケート結果で、話し方や説明の仕方がわかりにくいとの回答が出てきた。また、その結果が「関心が持てない」割合が増えたことにつながっているのではないだろうか。また、もう少しゆっくり進めてほしいという回答は2回のアンケート結果で変わらない割合になっている。全体の上のレベルに合わせて授業を進めるのではなく、学生の理解度を確認しながら授業を進めることが必要であると思われる。

#### A [改善策]

復習のために小テストを実施してきたが、個々の理解度を確認していくことを強化し、その結果を踏まえ次の授業に役立てる。また、教材や資料を充実を図り、DVDの視聴や現場の話を聞くことにより、子どもの存在を身近に感じられるような授業内容にしていく。学生同士が意見や思い、考えを言い合えるような環境を整え、学びを深める工夫をしていきたい。プリント(資料)はパワーポイントの速さを考慮したり、記入したり整理しやすいように改善していきたい。

また、話し方の速度、声の音量などにも配慮していき、学びやすい環境を整える。

#### (8) 3年次春学期「科目H」担当H

##### D [現状説明]

###### ① 現状説明

- ・幼免許の取得に向け、2年次の教育実習後、自身の課題を踏まえて臨む科目である。
- ・幼稚園教育要領の再理解を基盤として、教材研究と作成、演習、幼稚園での保育体験を取り入れ、実践的指導力を育むよう授業を進めている。
- ・筆者自身が5年間担当する中で、徐々に授業内容が実技中心になってきている現状にある。3年次の科目として、幼稚園教育に関わる様々な留意事項についての深い学びが必要ではないかという課題がある。

###### ② アンケートの実施結果

6/14(9回目の授業日) 回収率 98% 8/2(15回目の授業日) 回収率 71%

##### 「幼児教育指導法」授業アンケート結果

できている…4 ほぼできている…3 あまりできていない…2 できていない…1

NO	項目	6/14 → 8/2 (数値は%)		
		4	3	2
1	教材研究・作成・演習を繰り返し行い、この授業は忙しく濃密な内容です。自身の授業への取組は充実していましたか。	39 → 53	56 → 47	5 → 0
2	教職員間の連携を目的として、この授業ではグループワークを取り入れました。自身の中に協力・協同・連携・共有という姿勢は育まれてきましたか。	56 → 63	42 → 30	2 → 7
3	人形劇・パネルシアター・マリア幼稚園での活動等に取り組む際、子どもの発達を意識して保育を考えようとする気持ちや姿勢が身に付いてきましたか。	32 → 54	63 → 43	5 → 3
4	人形劇・パネルシアター・マリア幼稚園での活動等に取り組む過程で、子どもたちのために楽しいものにしようという気持ちちは出てきましたか。	51 → 70	44 → 27	5 → 3
5	大学での学びも3年目となります。2年の頃を振り返り、幼児教育についての専門的な知識や専門的な指導技術は次第に身についてきましたか。	32 → 47	46 → 47	22 → 6
6	幼児教育・保育で使われる専門的な用語を覚え、使えるようになってきましたか。	15 → 27	59 → 57	24 → 16
7	幼児教育・保育には理論としての深みがあります。少しは教師の役割の重要性や教師としての責任の大きさを理解出来るようになっていますか	30 → 40	63 → 60	7 → 0
8	これからのお子さん実習に向け、この授業での成果を活かそうという気持ちでいますか。	66 → 80	34 → 17	0 → 0

## C [点検・評価]

### (1) 効果が上がっている事項

- ① 教材研究・作成・演習を授業内で積み重ねることで、授業への取組は充実していると学生は感じている。
- ② 人形劇・パネルシアター・マリア幼稚園での保育体験等に取り組む中で、子どもの発達を意識し、子どもたちのために楽しい保育をしようという姿勢が育まれてきている。
- ③ 教師の役割の重要性や教師としての責任の大きさを理解出来るようになっている。
- ④ 11月の教育実習に向か、この授業での成果を生かそうという気持ちが育まれている。

上記が授業効果としてあげられる。やはり学生にとっては、実技等を通しての授業が子どもを身近に感じながら、やりがいと達成感を感じていることが推察される。

### (2) 改善すべき事項

- ① 幼児教育についての専門的な知識や専門的な指導技術は次第に身についてきたか。
  - ② 幼児教育・保育で使われる専門的な用語を覚え、使えるようになってきたか。
- 上記の質問事項については、(あまりできていない)という数値が、他の質問事項よりも多く、学生個々の達成感にばらつきが見られる。
- この授業において、幼稚園教育の基本・幼児理解・保護者支援・小学校教育との接続等々、修得しなければならない内容をどう修得させるべきか授業改善の必要を感じる。

## A [改善策]

- ① 指人形あるいはパネルシアターの作成と演習を減らして、幼稚園教育の指導に関する内容の授業の充実を図る。具体的には、PP等を使用して保育現場の実際や子どもの様子などにふれながら、専門的な指導技術の向上に努める。

## 4. A【改善策】

学生の主体的・意欲的な学びを通して、保育士・教員としての資質を高めるために、来年度は次のような取り組みを実践していきたい。

- ① 授業アンケートの内容等に関する見直しを図り、効果的なアンケートを実施する。
- ② 授業内容や準備学修に関して、学科会議等で意見交換を行い、担当科目の学修をさらに充実させる。
- ③ 授業の進め方や情報機器の使い方等授業方法を工夫する。